千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品(1)

－流山市三輪野山貝塚ならびに千葉市内野第1遺跡出土資料等から－

小 澤 清 男

はじめに

1985年3月に千葉県匝瑳市(旧八日市場市)大堀遺跡、多古町林遺跡・五十塚遺跡、千葉市北原遺跡の独鈷石について資料紹介するとともに、併せて千葉県内出土の独鈷石・独鈷石形土製品資料を集成し、独鈷石の機能・用途の一端に触れた(小澤 1985a・b)。また、4月には独鈷石の形式分類を行い変遷模式図を示した研究論文が発表された(後藤 1985)ほか、数ヶ月後に県内資料を扱った論文(1)が発表される(山岸 1985)など計4編の研究論文が発表され、1985年は近年における独鈷石・独鈷石形土製品研究にとって、画期となった年であった。

1985年の研究成果(小澤 1985a・b)は翌年一定の評価を受け(2)、それまで研究者の間で不明石器片や不明石製品として取り扱われることの多かった独鈷石について、その後、日本各地で多くの研究者による資料の掘り起こしと累積作業ならびに研究が行われた(吉朝 1987・1995、茂木 1987、山本 1998、平山 1998、滝沢 2001、岡本 1996a・1996b・2003・2004・2006・2008、山岸 1986・1987・1989・1990 ほか)。そうしたなか、近年、独鈷石を「白河型石器」(岡本 1996a)や「白川型石斧」(岡本 2003)とする名称が提唱されたが、その名称については機能未解明のままこれを白河型石器とする見解は、不必要に問題を複雑にするものであり撤回されるべきもの(渡辺 2003)という反対意見が出されるなど、独鈷石・独鈷石形土製品の研究は過去にない状況となっている。

そもそも、独鈷石という名称は、明治時代に仏具の独鈷に形が似ていたことからそう呼ばれたことに始まり、名称がその機能・用途と全く異なる石器の一つである。名称に関して同じような状況にある石器は、石冠、石棒、石剣、凹石、石皿、石匙など実に多い。かつて、道具の名称が機能・用途を表していないことについて、研究の段階的な問題であり、研究の進展した今日では周知の前提であることと、道具を分類・区別する上での一種の便宜的な「記号」化したものになりつつあり、道具本来の機能・用途とは全く別と考えている(小澤 1985b)と述べた。その考え方は、現在でも変わりはない。独鈷石の名称については、近年、様々に呼称されている(3)が、明治時代から既に100年以上も用いられ、既に研究者や広く一般の方々にも浸透している学術用語を研究途中の確実性のない段階に様々に変更することは、研究の煩雑さと混乱を生むだけではないだろうか。永い研究史を経て、多くの道具の名称がその機能・用途を表していないことは周知のことであり、確実性のない段階に様々な名称を付け、敢えて学術用語を変更する必然性は全くないと考えるからである。

本稿で取り扱う独鈷石・独鈷石形土製品は以前にも指摘したとおり、石冠が「石冠」→「石冠形土製品」へと変化する遺物であるのと同様、「独鈷石」→「独鈷石形土製品」へと変化する遺物である。そして、独鈷石は縄文時代後期前半から晩期を経てさらに時代を超え弥生時代中期後半まで出土する遺物である(4)。このことは狩猟・漁撈・採集社会に出現した道具が、縄文時代晩期末で消滅することなく弥生時代に入っても依然と根強く狩猟・漁撈・採集社会の祭祀・儀礼行為を継続ないしは残存していた証拠であり、そうした背景からも見過ごすことの出来ない遺物である(小澤 1985a・b)。

近年の研究で、岩手県宮古市上村貝塚出土の石器に「有角石斧(有角石器)とも独鈷石とも受け取れる石器」

の存在が指摘され、独鈷石から有角石斧(有角石器)への変遷の可能性が提起された(小田野 1991)。その提起を基に、有角石斧(有角石器)の系譜は独鈷石であるという見解が出された(岡本 1996b・1999a)。しかし、狩猟・漁撈・採集社会に出現した道具である独鈷石が、なぜ時代を超えて弥生時代中期後半まで出土するのかという最大の問題に的確に答えるには至っていない。

今回、本稿では、独鈷石資料の調査研究方法の確立と計測値等のデータの共有化を目指し、独鈷石資料の研究を進めて行く上での基準を設けるという基礎作業を行い、その基準に基づいて流山市三輪野山貝塚をはじめ佐倉市岩富上ノ袖東遺跡、香取郡東庄町浅間西遺跡、香取市苅毛南遺跡、山武郡芝山町折戸遺跡、千葉市六通貝塚、同押元貝塚、同内野第1遺跡出土の独鈷石14点と成田市荒海貝塚出土の独鈷石形土製品1点の合計15点について報告する(5)。また、併せて千葉県内出土の資料について前回の作業(小澤 1985b)にその後の新資料を加えて補遺・訂正を行い、現状を正確に把握することに努めた。そして、次号の第37号に掲載予定の「千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品(2)」で、考察を行うものである。

1 研究史

独鈷石・独鈷石形土製品の研究史は既に詳細にまとめられている(米田 1981)ので、そこで取り上げた内容については触れないこととする。しかし、そこで取り上げられなかった打製独鈷石の研究史について既に部分的に取り上げられてはいる(岡本 2003・2004)ものの、体系的にまとめられたものは無いので、今回、本稿で千葉県内の打製独鈷石を報告するのにあたり、打製独鈷石を中心とした研究史についてまとめておくことにしたい。

打製独鈷石が初めて学界に取り上げられたのは、1900(明治33)年3月4日、東京人類学会が理科大学人類学教室で開催した東京人類学会第154例会で、野中完一が「打製独鈷石に就て」と題して行った講演である(野中 1900)。この記述から、この頃には既に打製独鈷石が学術用語として学界に登場し、研究者の間に打製石器のなかにも独鈷石があるという認識が存在しはじめたと考えられる。野中によるこの講演は、それから9年後の1909(明治42)年、大野雲外による「独鈷石の形式分類に就て」の発表に繋がり、そのなかで大野は「本邦諸地方の遺跡から石器類を発見する中に独鈷の形式に似たる一種の石器を発見・・・」と述べている。この大野の記述には、東京人類学会を中心として独鈷石の名称が学術用語として成立していく過程が窺える。そして、大野は独鈷石を一号、二号、三号の3種類に分類し、三号としたものは稀であることと打製石斧の中にも同じものがある(大野 1909)と述べ、今年からちょうど100年前に打製独鈷石の存在を明確に指摘した。野中や大野の指摘から約30年後、後藤守一が代表を務める日本古代文化学会が『古代文化』第12巻第4号で「独鈷石に関する共同調査」と題して、日本古代文化学会として独鈷石の全国的な共同調査を呼びかけた(後藤 1941)。翌月号の『古代文化』には甲野 勇が加曽利貝塚出土の磨製の独鈷石(第8図-34)を詳細な実測図で報告し(甲野 1941)、これに続いて各地の研究者が次々に報告を行った。その後、打製の独鈷石があるという指摘は、編纂作業が戦前から行われ戦後間もない1951(昭和26)年に刊行した『埼玉県史』第1巻の編纂に生かされ、その中には打製独鈷石が紹介されている(稲村他 1951)。1954(昭和29)年、慶応大学考古学研究室が青森県下北郡東通村札地遺跡のストーン・サークルを発掘調査した際、その近くで採集した打製の独鈷石を渡辺 誠は、「果たしてこれを未成品と見てよいかどうか私には確信をもてないのであるが、敲打されてない部分とされている部分との境界線の輪郭が独鈷状石器にとてもよく似ているのである。」と述べ、他の2例と併せて「所謂独鈷状石器の未成品の例」として紹介した(渡辺 1961)。その後、渡辺の独鈷石に未成品があるのではないかという見解に賛同して独鈷石の未成品を集成したのが山岸良二で、渡辺の紹介した3例の他に9例を紹介した(山岸 2000)。しかし、渡辺や山岸の独鈷石の未成品があるとし

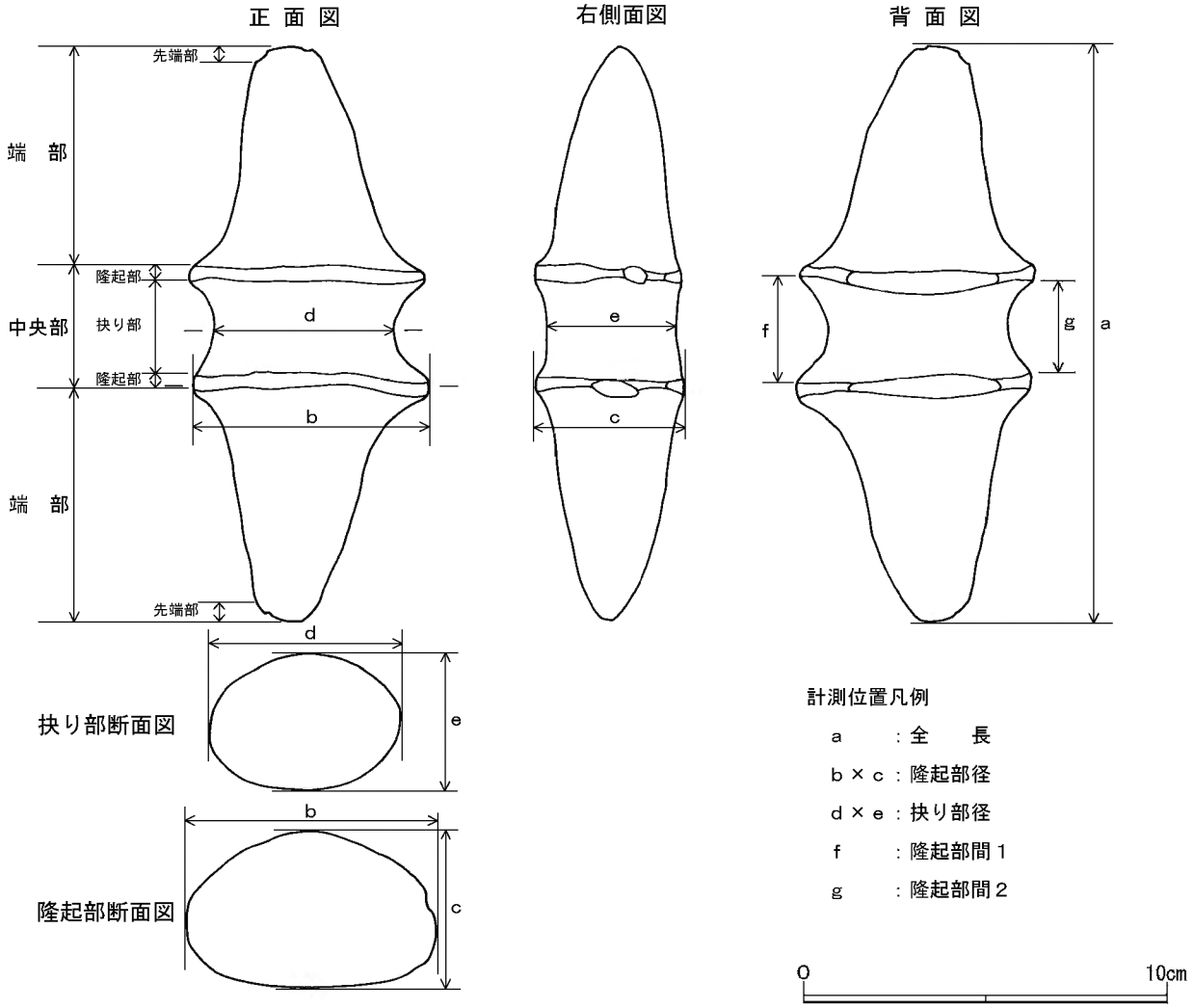
た見解に対して、1909(明治42)年に大野が三号と分類した独鈷石には磨製と打製のものがあるとした分類を基に、岡本孝之は横断面が扁平化したタイプの独鈷石には打製のものと磨製のものとがあり、打製のものはこれまで未成品と考えられていたものであるが完成品の打製独鈷石に位置づけられるとし、渡辺と山岸が未成品と発表した資料を含む17例を挙げ、4例をZタイプ(札地型)に分類し完成品の打製独鈷石(6)とした(岡本　2003)。そして、岡本はこれまで未成品として取り扱われていた資料について再検討の必要性を指摘し、その翌年埼玉県内資料の再検討を行い、横断面が扁平化した打製独鈷石を矢野下型、札地型、上下非対称型の3タイプに分類し、多数の打製独鈷石を報告した(岡本　2004)。

こうして、既に100年前に野中や大野が存在を発表した打製独鈷石に、近年、ようやく光が当りだしたのである。

2　独鈷石の調査方法

独鈷石の調査研究を行っていく上で、現在、研究者間で資料の各部位の名称や計測位置がばらばらで基準がないことが、支障になっているように思われてならない。

独鈷石の形態的特長の一つに、抉り部と隆起部が全周または一部につくり出されていることである。また、整形上の特徴として、独鈷石の抉り部は打製石斧のものとは異なり丁寧に整形されていることや、両端部が石棒や石



第１図　独鈷石各部位の名称と計測位置
註：モデルに使用した資料は、佐倉市岩富上ノ袖東遺跡出土(11-a)の独鈷石である。

剣などと同様に丁寧に研磨されていることである。なかには、両先端部が磨製石斧の刃部のように研磨されているものもある。こうした形態的特長や整形の特徴は独鈷石特有の特徴であり、独鈷石の機能・用途と密接な関係があることは言うまでもない。また、独鈷石のなかには両先端部に剥離痕や磨耗痕などが認められるものがあり、槌・敲打具や磨石のような行為を伴った可能性が考えられている。こうした独鈷石の特徴から、その道具の機能・用途を解明し、その道具が出現した背景や変化の背景、更に消滅していく背景などを解明していこうとするならば、現在、各研究者間でばらばらに使われている各部位名や計測位置に基準を設け、その基準に基づいて計測値等を求め分析・研究していくことが重要と考えた。研究対象資料の特徴をより明確に捉えるためには、客観的な観察と計測値の統計的な蓄積が最も重要な作業である。今回、その基準として次のような各部位名を提案するとともに、併せて次のような計測位置を提案し、その方法を試みることにした。

各部位の名称については、本稿で使った各部位の名称を第1図に示した。大区分として「中央部」・「端部」2箇所(図上で上端部と下端部)の3部に区分した。さらに、大区分の中央部を「抉り部」・「隆起部」2部の3部に小区分し、大区分の上下の端部はそれぞれの端部の先端を「先端部」とした。ただし、上下の端部を総称する場合には「両端部」という表現を用い、上下の先端部を総称する場合には「両先端部」という表現を用いた。また、中央部の隆起部が全周している場合には「帯状隆起」という表現も用いることにした(7)。

計測方法については、第1図に計測位置を示した。両先端部の先端間は「全長」とし、図中に「a」で示した。中央部の隆起部は最大径を図中に「b」で、最小径を図中に「c」で示し、第1表の一覧表で「隆起部径」を「b×c」と表記した。中央部の抉り部は最大径を図中に「d」で、最小径を図中に「e」で示し、第1表の一覧表で「抉り部径」を「d×e」と表記した。また、独鈷石の機能・用途を研究する際、中央部の抉り部と隆起部の関係を観察していくことが重要である。独鈷石のなかには第1図のモデルに使用した佐倉市岩富上ノ袖東遺跡出土資料(11-a)のように、隆起部間に長い部分と短い部分があるものがある。そこで、隆起部間の長い部分を「隆起部間1」として図中に「f」と示し、短い部分を「隆起部間2」として図中に「g」と示し、第1表の一覧表で隆起部間を「f・g」と表記した。隆起部間に差が無い場合は、「f」と「g」が同一とみなし一つの計測値を記載した(8)。

今回の研究で求めた a～g の計測値は、100分の1mmまで計測可能なダイヤル・ノギス(9)を使用して10分の1mmまで計測し、単位はcmで表記した。重量については、100分の1gまで計測可能な電子計測器(10)を使用して10分の1gまで計測し、単位はgで表記した。なお、計測位置内に欠損部がある場合は(　　)で、前回調査の計測値(小澤　1985b)を記入した場合には[　　]で、報告書等から引用した場合には〈　　〉で表記した。そのほか、遺存度は10/10～1/10までの10段階に分類し、それを記載した。使用石材の岩質については、地質学・鉱物学の研究者に鑑定を依頼して、その鑑定結果を記載した。特記事項については、整形の違いやベンガラなど赤彩痕の有無ならびに被熱痕の有無、また他の利器への転用等を記載した。また、先端部に剥離痕ならびに磨耗痕等が認められた場合には、その痕跡の有無等を記載した。

3　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品

千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品を報告するにあたり、遺跡名の前に遺跡番号を表記し、第6図　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品出土遺跡分布図と対応するようにした。また、遺跡名の後にアルファベットの遺物記号を表記し、第1表　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品一覧表と対応するようにした。

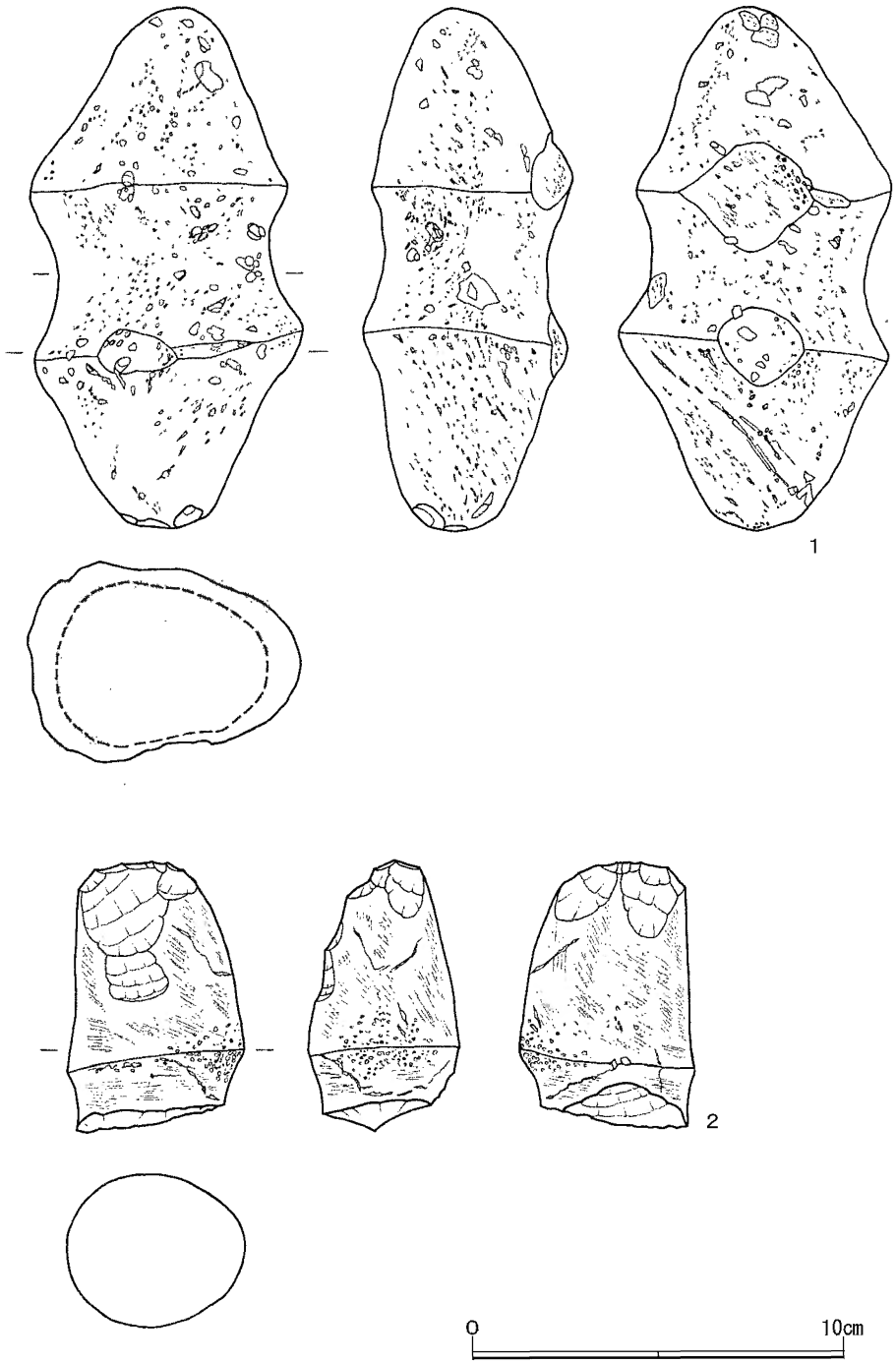
2　三輪野山貝塚 a・b　(第2図－1・2、写真図版2)

三輪野山貝塚は、江戸川低地から下総台地を樹枝状に小支谷が開析する江戸川左岸の標高約18～20mの台

地上に所在する。貝塚の規模は東西約120m・南北約100mを測り、縄文時代後期初頭から晩期中葉に形成された第1から第5貝塚の貝層が馬蹄形に分布する。1988(昭和63)年から2007(平成19)年まで流山市教育委員会により実施された発掘調査の結果、従来、三輪野山八幡前遺跡として別の遺跡としていた東側隣接区域が、東窪地として三輪野山貝塚に含まれることや、環状盛土遺構が祭祀空間である中央窪地を取り囲むように形成されていたことが明らかになった。さらに、貝塚や環状盛土遺構を伴う中央窪地型環状集落の実態が明らかになった。発掘調査により検出された遺構は多数の竪穴住居跡の他に、窪地内から東西に延びる晩期の道路状遺構があり、西側低地に降りる急斜面部には階段状遺構が検出された他、その近くからは水場遺構も検出された。遺物は、多量の土器の他に土偶や石棒・石剣など祭祀系遺物が多数出土した他、大石や翡翠の原石と未成品なども出土しており、長期間にわたり継続した拠点的集落の様相が明らかになった(小川・小栗 2003、小栗・小川・宮川 2008)。なお、独鈷石は中央窪地から1点と東窪地から1点の合計2点出土した。

2-a (第2図－1、写真図版2)

中央窪地MMS6第6地点 J14-00グリッドの縄文時代晩期中葉の遺物包含層から出土した完形の独鈷石である。形態は横断面形がやや扁平気味で両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鈷石である。特徴は、中央部の抉り部をつくり出すことで隆起部をつくり出しており、隆起部間が両端部の長さとほぼ同じ長さである。隆起部と抉り部の断面形は押しつぶしたような扁平気



註：破線は、抉り部断面形を表す。

第２図　千葉県内出土の独鈷石実測図（１）
１．２．流山市三輪野山貝塚出土（2-a·b）

味の不正楕円形で、全体を丁寧な研磨により仕上げている。両先端部には磨耗痕(11)が顕著なほか、一方の先端部には弱い打撃による剥離痕も認められる。その他、表裏面の一方の隆起部が削られ平坦面がつくり出されており、この様な平坦面について使用法に関連する痕跡の可能性が指摘されている(平山 1998)。石材は安山岩質のスコリア(12)で、手に持った感じは大きさの割に比較的軽く、器面には安山岩質のスコリアに特有の多くの気孔が観察できる。なお、計測値等は第1表に記載している。

2-b(第2図－2、写真図版2)

東窪地MHB3-172号住居跡の床面から約7cm上の覆土1層と2層の境から出土した独鈷石で、中央部の抉り部で折損している。形態は断面形がほぼ円形の、おそらく両端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鈷石である。整形は、2-aと同様に中央部の抉り部をつくることで隆起部をつくり出し、全体を丁寧な研磨により仕上げている。先端部には、数度にわたった打撃による剥離面があり、何度も打ちつけたことによると認められる剥離痕が顕著である。石材は、緑色岩である。なお、独鈷石が出土した東窪地のMHB3-172号住居跡は、柄鏡形住居である。計測値等は第1表に記載している。

11 岩富上ノ袖東遺跡 a (第3図－1、写真図版2)

独鈷石が発見された経緯は、1956(昭和31)年頃、岩富533番地に居住していた故・檜垣熊吉氏が岩富1,995番地の畑(現在、檜垣家の宅地)を耕作中に発見したものである。独鈷石を発見した檜垣氏は、当時、岩富1,995番地の畑を故・檀谷健蔵氏より借用して耕作しており、発見後直ちに畑の持ち主であった檀谷氏に届けた。当時、檀谷氏は千葉県立佐倉東高等学校で教鞭をとられており、おそらくこの遺物が縄文時代の貴重な道具の一つであることをすぐ理解されたため、今日まで散逸を免れたと思われる。現在は、檀谷健治氏が大切に所蔵されている。独鈷石が出土した岩富1,995番地は、『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区(改訂版)―』(千葉県教育委員会 1997)の佐倉市遺跡番号664の岩富上ノ袖東遺跡である。

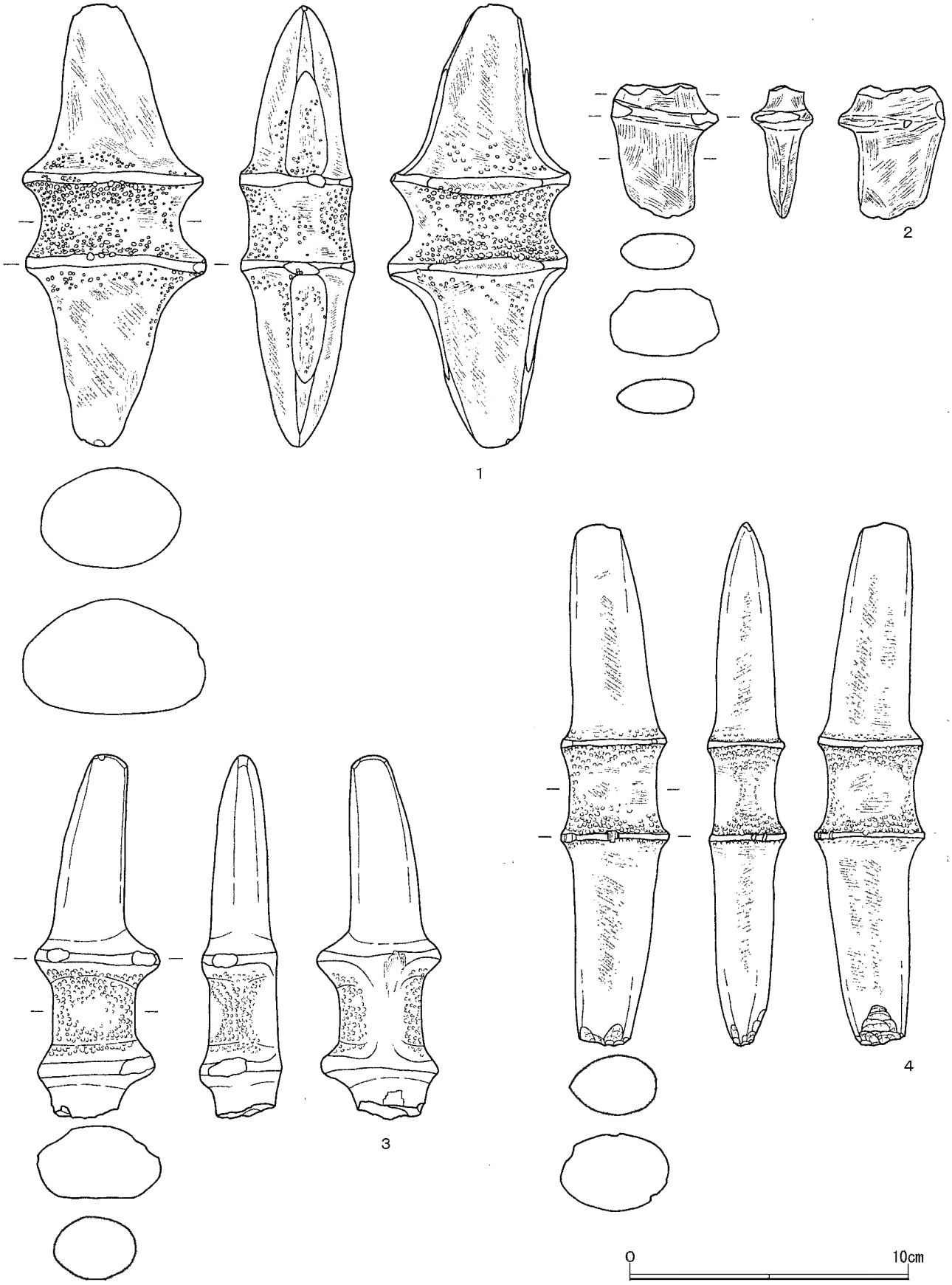
岩富上ノ袖東遺跡は、鹿島川の右岸標高約35mの台地上に所在する。過去に行われた3回の発掘調査の結果、縄文時代に限れば前期・中期・後期・晩期の遺構・遺物を包蔵し、特に、第2次調査区の南側で後期中葉(加曽利B式期)の遺物が極めて多く出土しており、当該期の相当規模の集落が展開していたことを示唆している(青柳 2007)としている。独鈷石が出土した地点が、多くの遺構・遺物が検出された第2次調査区の南側隣接地であることから、この区域が岩富上ノ袖東遺跡のなかで特別の区域であると考えられる。

独鈷石は、両端部の長さがほぼ同じ上下対称形である。中央部の抉り部に製作時の敲打痕が斑点状に認められ、隆起部ならびに両端部は丁寧な研磨による仕上げである。両先端部は、磨製石斧の刃部状に丁寧に研磨されている。この独鈷石の特徴は、両端部の両側面に削り取ったような面取り部と、表裏面の一方の隆起部に研磨により平坦面がつくり出されていることである。この平坦面は、三輪野山貝塚中央窪地出土2-a に見られる平坦面と同様のものと思われ、使用法に関連する痕跡の可能性が考えられる。石材は、変質閃緑斑岩である。なお、計測値等は第1表に記載している。

15 荒海貝塚 a (第3図－2、写真図版1)

独鈷石の形をした土製品である。この独鈷石形土製品は、1961(昭和36)年、早稲田大学考古学研究室による第2次調査で出土した土製品で、既に他の土製品とともに概要が報告されている(西村他 1965・西村 1976)。その中で、性格があきらかでないものとして独鈷状土製品の名称で報告されているもので、今回、改めて実測し、独鈷石と同じ展開図に基づき独鈷石形土製品として報告させていただいた。

この土製品は、中央部の抉り部で折損しているが、独鈷石の特徴である隆起部と抉り部が丁寧につくり出されて



第３図　千葉県内出土の独鈷石、独鈷形土製品実測図（２）

1．佐倉市岩富上ノ袖東遺跡出土(11-a)　2．成田市荒海貝塚出土(15-a)
3．東庄町浅間西遺跡出土(16-a)　4．香取市(旧粟源町)苅毛南遺跡出土(20-a)

おり、独鈷石形土製品である。横断面は扁平で、先端部の形状は磨製石斧の刃部形である。成形は比較的丁寧なつくりで、器面には刷毛目状の細かい条線が顕著に認められ、焼成は良好である。残存部の長さから推定全長は約 9.5cmであり、小型の独鈷石とほぼ同じ規模である。なお、計測値等は第1表に記載している。

16 浅間西遺跡 a （第3図－3、写真図版2）

浅間西遺跡は、利根川の支流桁沼川右岸標高約3m前後の低地砂堤上に所在し、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代・奈良平安時代の包蔵地である（千葉県教育委員会 1998）。出土地点は東庄町笹川い 1,834 番地の林敬之氏の敷地内であり、敬之氏が父・保雄氏から伝えられていることによれば、昭和初期に敷地内の建物を取り壊した際に出土したもので、その場所は西側に建っている土蔵の南側付近であったらしい。この地点は遺跡範囲のなかで西側区域に当たり、標高が比較的他の地点より約 1.5～2.0m高い区域の一画である。

独鈷石は端部の一方を欠いているが、中央部が良く残っており全体を復元することが可能である。形態は、端部が細身の割に中央部の隆起部が太く隆起が高いのが特徴で、端部は中央部の抉り部を基点としてハの字形である。断面形は抉り部と隆起部が楕円形だが、端部は先端に行くほど扁平である。抉り部に製作時の敲打痕が斑点状に認められるが、端部を丁寧な研磨により仕上げた細身の独鈷石である。先端部は磨製石斧の刃部状に研磨されており、磨耗痕が顕著である。その他、この独鈷石の特徴は、表裏面の一方の隆起部が削られ平坦面がつくり出されていることである。石材は、角閃岩である。なお、計測値等は第1表に記載している。

20 苅毛南遺跡 a （第3図－4、写真図版1）

独鈷石が発見された経緯は、1904（明治37）年9月、故・石橋茂助氏により苅毛431番地－1の畑から発見されたと伝えられ、その場所は現在、石橋博之氏の畑である。その畑の一角に、発見された際に茂助氏が建立したと伝えられている「明治三十七年九□」の紀年銘が彫られた石碑が建っており、幸いにも出土した年代と場所が判明した貴重な資料である。

独鈷石が出土した畑は現在香取市であるが、旧栗源町で『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）―香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）―』（千葉県教育委員会 1998）の栗源町遺跡番号 52 の苅毛南遺跡である。

苅毛南遺跡は栗山川右岸の台地上に所在し、前掲の分布地図によると、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺跡で、弥生土器・土師器の散布する包蔵地である。その他、『栗源町史』には、苅毛南遺跡の出土遺物に縄文土器（破片）と独鈷石があると記載されている（栗源町 1974）。

独鈷石は、中央部の抉り部に製作時の弱い敲打痕が斑点状に認められるが、中央部の隆起部を含む全体を極めて丁寧な研磨により仕上げている。形態は、両端部のバランスが良く16-aと同じ細身の独鈷石で、端部が中央部の抉り部を基点にハの字形である。器面には使用石材の岩質の特徴が良く出ており、美麗である。先端部は、一方の先端部が磨製石斧の刃部状に研磨されているが、もう一方の先端部には数度にわたる打撃による小さな剥離面が多数あり、何回も打ちつけたことによると認められる剥離痕が顕著である。使用石材は、東庄町浅間西遺跡16-aと同じ角閃岩である。なお、計測値等は第1表に記載している。

23 折戸遺跡 a （第4図－1、写真図版2）

独鈷石発見の経緯は、1969（昭和44）年、山武郡芝山町に住んでいた戸村正己氏の実弟・桜田 努氏が、高谷と殿部田の境界に所在する西福寺の北方約30mの地点で山芋を掘っていた際に、地表から約50cm掘り下げた所から出土したものである。独鈷石を発見した桜田氏は、普段から兄の戸村氏と自宅前に広がる高谷川低地遺跡から土器片や石器等を採集し、縄文時代の遺物を見ていたため直ぐこれが古い石器の一種と思い、兄の戸村氏に届けた。当時、中学生だった戸村氏は、時々この変わった形をした石器を見てはどのような石器なのか図書館

で考古学関係の図書を調べながらいろいろ想いをめぐらしていたという。発見者の桜田氏に出土地点を確認したところ、独鈷石が出土した地点は山武郡芝山町高谷と殿部田の境界付近であるが、殿部田ではなく高谷に入った地点であった。その地点は、『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)―』(千葉県教育委員会 1998)の芝山町遺跡番号128の折戸遺跡斜面直下であり、折戸遺跡に含まれると考えられる(13)。

折戸遺跡は栗山川の支流である高谷川左岸の台地上に所在し、遺跡からは縄文時代晩期の高谷川低地遺跡が見渡せる絶景の地である。前掲の分布地図によれば、縄文時代に限ると後期の遺跡で遺物は加曽利B式土器であると記されているが、遺跡内からは後期の土器片の他に晩期の千網式土器片などが採集されており(戸村他 1995)、後期・晩期の遺跡である。独鈷石が出土した地点は、晩期の土器片が採集された東側区域の真下に当たるため、おそらく台地上から土砂とともに斜面直下へ流れ落ちたものと考えられる。

独鈷石は、中央部の抉り部に製作時の敲打痕が斑点状に認められ、全体を研磨により仕上げている。断面形は扁平気味で、両端部は少し細めになるものの厚みがある。また、両端部の長さに約1.5cmの差がある。上端部の先端部には磨耗面を残し、その周辺部に強い打撃による剥離面があることから、磨耗後に剥離があったと考えられる。また、下端部の先端部には、数度にわたる強い打撃による剥離面が多数認められ、何回も打ちつけたことによると認められる剥離痕が顕著である。本来は上下対称形で端部の長さがほぼ同じであったが、強い打撃による剥離を繰り返したため下端部の長さが短くなったものと考えられる。石材は、緑色凝灰岩である。なお、計測値等は第1表に記載している。

31　六通貝塚a（第4図－2、写真図版2）

六通貝塚は、現在の地番表示で千葉市緑区おゆみ野中央7丁目に所在する。かつては、下総国千葉郡小金澤(こかんざ)村の飛地であったため、大金澤(おおかんざ)村の中にありながら、小金澤村であった(千葉市 1993)。1889(明治22)年、椎名村の村制施行に伴い千葉郡椎名村大字小金澤字六通となり、1955(昭和30)年、椎名村が千葉市に合併し千葉市小金沢町となり(14)、その後の区画整理により現在の地番表示となった。

1995(平成7)年～1998(平成10)年まで行われた発掘調査の結果、縄文時代後期初頭から晩期にわたる双弧状の大型貝塚を伴う拠点集落であることが明らかとなり、出土遺物には特に動物形中空土製品と呼ばれる円筒形の立てることが可能な動物形土製品がある(西野 2007)。

この独鈷石は、1892年(明治25年)に三宅米吉が『東京人類学会雑誌』に「千葉県下総国平山村ノ貝塚ヨリ得タル許多ノ石器ノ中ニ、此ノ石器ノ折レトオボシキモノアルヲ見タリ、即上ノ第一図ノ如シ。」と記述し、土偶と一緒に数少ない石器の一つとして雷鼓という名称で紹介したものである(三宅 1892)。現在、東京国立博物館に収蔵されており、収蔵品目録には名称を独鈷石残欠、遺物番号を1421、出土地を千葉市六通貝塚(15)と登録されている(東京国立博物館 1979)。

中央部の抉り部で折損しているが、形態は残存部から流山市三輪野山貝塚中央窪地出土の2-a と同様のタイプの独鈷石である。断面形は、扁平気味の歪な楕円形である。整形は中央部の抉り部を含めて、全体を丁寧な研磨により仕上げている。先端部に弱い打撃による小さな剥離面があるほか、隆起部に強い打撃による剥離痕が顕著である。石材は未鑑定である。なお、計測値等は第1表に記載している。

34　押元貝塚a（第4図－3、写真図版2）

押元貝塚の名が学界に紹介されたのは早く、加曽利貝塚と同じく1887(明治20)年に上田英吉が発表した「下総国千葉郡介墟記」による(上田 1887)。そのなかで上田は、千葉では石灰の製造や道路補修の時に貝塚の貝を用いており、その貝を取る場所として「・・・其ノ他小金澤村字六通、平山村字築地台及ビはそべ、坂尾村字押も

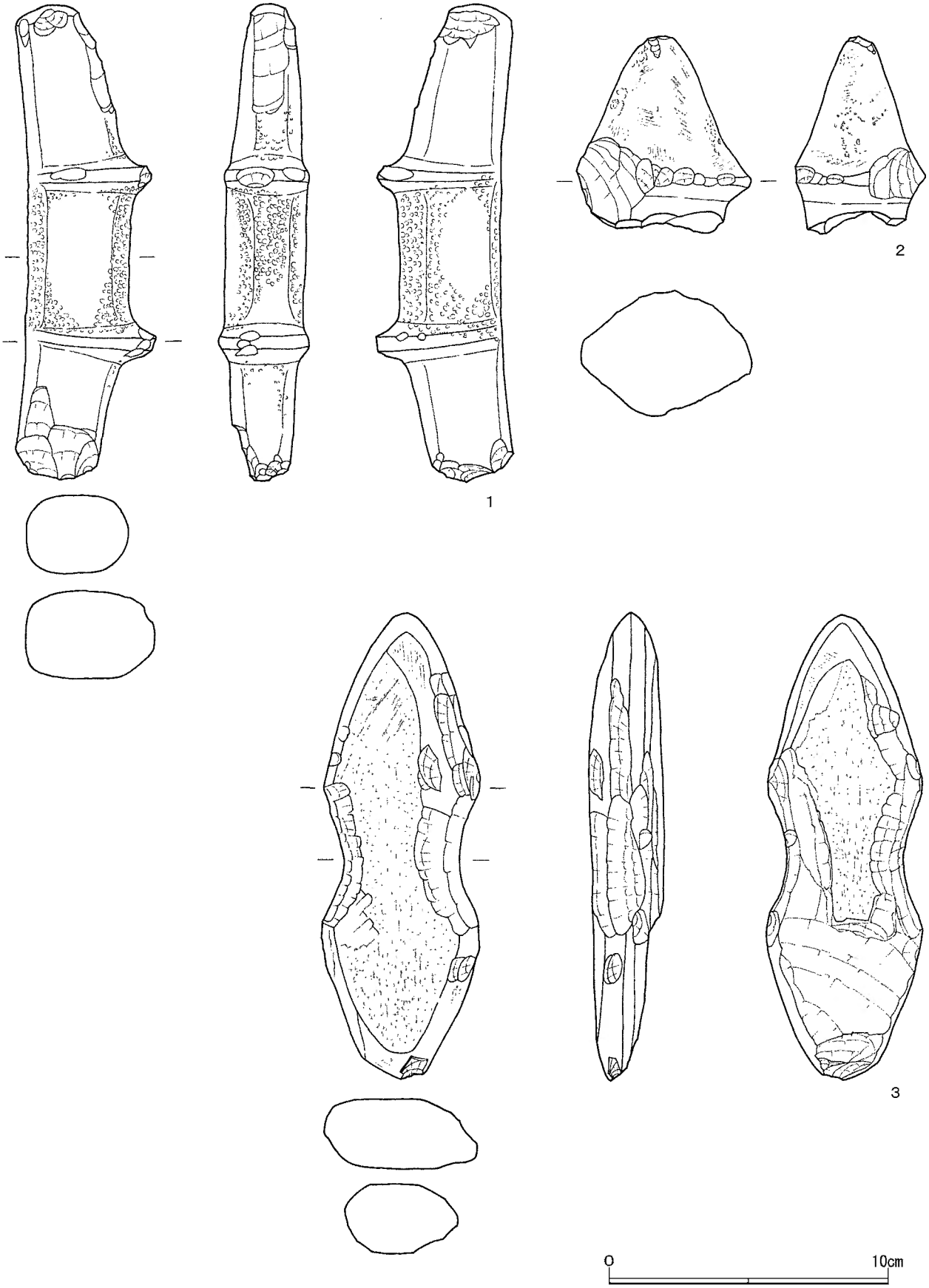
と、・・・」と記載し、六通、築地台、長谷部などとともに押元の地名を挙げている。

1953(昭和28)年に刊行された『千葉市誌』は、縄文時代遺跡地名表の中に11押元、12押元(東)、13上坂尾貝塚の3貝塚を挙げている(千葉市 1953)。1959(昭和34)年に刊行された『千葉県石器時代遺跡地名表』は、通番号165・番号32上坂尾と通番号173・番号40押元、通番号174・番号41押元(東)の3貝塚を挙げ(伊藤他 1959)、同年に刊行された『日本貝塚地名表』は、通番号938・地方番号531上坂尾と通番号939・地方番号532押元、通番号940・地方番号533押元(東)の3貝塚を挙げている(酒詰 1959)が、1984(昭和59)年に千葉市教育委員会が刊行した『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)附篇』は、分布調査の結果 I－8－3押元と単一の馬蹄形貝塚とした(千葉市 1984)。1976(昭和51)年に刊行された『千葉市史 史料編1』原始古代中世は、縄文時代遺跡地名表中に№87押元貝塚(押元・押元西貝塚)と1貝塚として挙げている(千葉市 1976)。1983(昭和58)年に刊行された『千葉県の貝塚 ―千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書―』は、東西200m、南北200mの馬蹄形および点列貝塚2か所と記載しており(千葉県教育委員会 1983)、いかに規模が大きい貝塚かということが解る。かつて、押元貝塚は規模が大きいがゆえに、複数貝塚と考えられていたのである。

この独鈷石は現在、東京大学総合研究博物館に収蔵されており、収蔵番号は4767番である。収蔵に至る詳しい経緯は不明であるが、資料に「506」の朱書の遺物番号が記されるとともに、「下総国千葉郡上坂尾村」と墨書されている。この「506」の朱書の遺物番号については、東京大学総合研究博物館による調査が行われ、朱書の遺物番号は1884(明治17)年の目録作成に際して付けられたことが判明している(初鹿野・山崎・諏訪 2006)。1884(明治17)年の目録には、「506. Stone implements(from K.Kato) 3.Sakaomura,Chiba Co,Chiba」と記載されており(University of Tokio 1884)、この独鈷石のことと思われる。「下総国千葉郡上坂尾村」の墨書は採集地と考えられるため、該当地域を調査した。千葉市若葉区大宮町1,113番地に所在する大宮神社に、「嘉永七年四月吉日建立」の紀年銘が彫られた常夜塔がある。その常夜塔には常夜塔を奉納した上坂尾村名主 林忠右衛門他28名と坊谷津組頭 小林太郎右衛門他16名、下坂尾村組頭 若林平左衛門他14名、長峰村名主 市原五郎右衛門他5名の連記があり、江戸時代後期嘉永年間には上坂尾村という村名が確かに存在したことが判った。

史料に上坂尾村の名が出てくるのは、1871(明治4)年の坂尾村と長峰村の中峠野秣場分地50町歩の分割をめぐる1件を記録した「字中峠野議定書」(明治四年辛未年二月)で、議定書には上坂尾村と下坂尾村の村名が見える。千葉市史では、史料に見える上坂尾村と下坂尾村という村名は、正しくは上坂尾郷と下坂尾郷とすべきであるとしている(千葉市 1977)が、上坂尾村と下坂尾村という村名は実質的に1887(明治20)年の坂尾村と長峰村両村が合併して大宮村となるまで使われていた。明治時代前半まで坂尾村では、村内を上坂尾村と下坂尾村に分けており、上坂尾村と呼ばれていた当該地域で、独鈷石が採集可能な縄文時代後期から弥生時代の遺跡は押元貝塚だけであり、この独鈷石は明治時代の早い段階に押元貝塚から採集されたものであろう。

東京帝国大学が1887(明治20)年に出版した『日本石器時代人民遺物発見地名表』第1版には、千葉郡の遺跡として挙げた貝塚のなかに「坂尾村字押モト貝塚」と「上坂尾村貝塚 人骨、(独鈷石学室蔵)」の記載がある(田中・林 1887)。一見すると別々の貝塚のようであるが、実は前述したように、かつて押元貝塚は規模が大きいがゆえに複数貝塚と考えられていたことと、この頃まで坂尾村のなかに上坂尾村と下坂尾村と呼ばれた区域があったことによる村名の混乱が生じていたためと考えられ、「坂尾村字押モト貝塚」と「上坂尾村貝塚」という貝塚表記は、同一の上坂尾村の押元貝塚のことを指しているものと考えられる。人骨については小金井良精が報告している(小金井 1890)が、独鈷石学室蔵と記載されている独鈷石については、1884(明治17)年の目録作成の際に「506」と朱書の遺物番号が記され「下総国千葉郡上坂尾村」と墨書された東京大学総合研究博物館に収蔵されている収蔵



第４図　千葉県内出土の独鈷石実測図（３）

１．芝山町折戸遺跡出土(23-a)　２．千葉市六通貝塚出土(31-a)
３．千葉市押元貝塚出土(34-a)

番号4767番の独鈷石の可能性が高いと考えられる。

独鈷石は、横断面が扁平で端部の長さが隆起部間とほぼ同じ長さの上下対称形で、かつ大型品である。板状に剥がした扁平な縦長の石を素材としており、両面に自然面を残している。整形は端部の一部に研磨痕があるが、中央部の抉り部から側面部にかけて剥離により抉り部をつくり出しており、基本的な整形は打製である。下端部の先端部に強い打撃による大きな剥離面がある。その他、器面のほぼ全面に炭化物の付着が認められたが、この炭化物がどこでどのように付着したかは不明である。例えば、大堀遺跡出土の独鈷石18-a は、農家の神棚に保管されていたため囲炉裏や竈から立ち上る煙により石材の鑑定が難しいほど器面全体に炭化物が付着していた。採集から収蔵までの経緯が不明なこの資料の場合、大堀遺跡出土例と同じような経緯があったことも考えられ、慎重に取り扱うべき付着物と思われる。現状では被熱による赤化などの被熱痕は、認められなかった。なお、計測値等は第1表に記載している。

37 内野第1遺跡 a・b・c・d・e・f（第5図－1・2・3・4・5・6、写真図版1・2・3）

内野第1遺跡は千葉市花見川区宇那谷町に所在し、印旛沼に流れ込む勝田川の左岸、標高13～25mの河岸段丘から低湿地・河床面に広がる縄文時代中期・後期・晩期及び古墳時代・平安時代の集落遺跡である。宅地開発に伴い1989（平成元）年から1996（平成8）年まで約8年間にわたり発掘調査が実施され、その成果は3分冊にわたる発掘調査報告書により報告されている（古谷・田中他 2001）。

本稿では、発掘調査により出土し既に発掘調査報告書で報告されている4点と補遺として調査担当者による研究論文で報告されている1点（田中 2005）の計5点について再調査ならびに再実測し、併せてその後の整理調査により新たに確認できた1点について調査ならびに実測し、既に報告されている5点の他に新たに確認できた1点を加えた合計6点について報告する。なお、計測値等は第1表に記載している。

37-a（第5図－1、写真図版2）

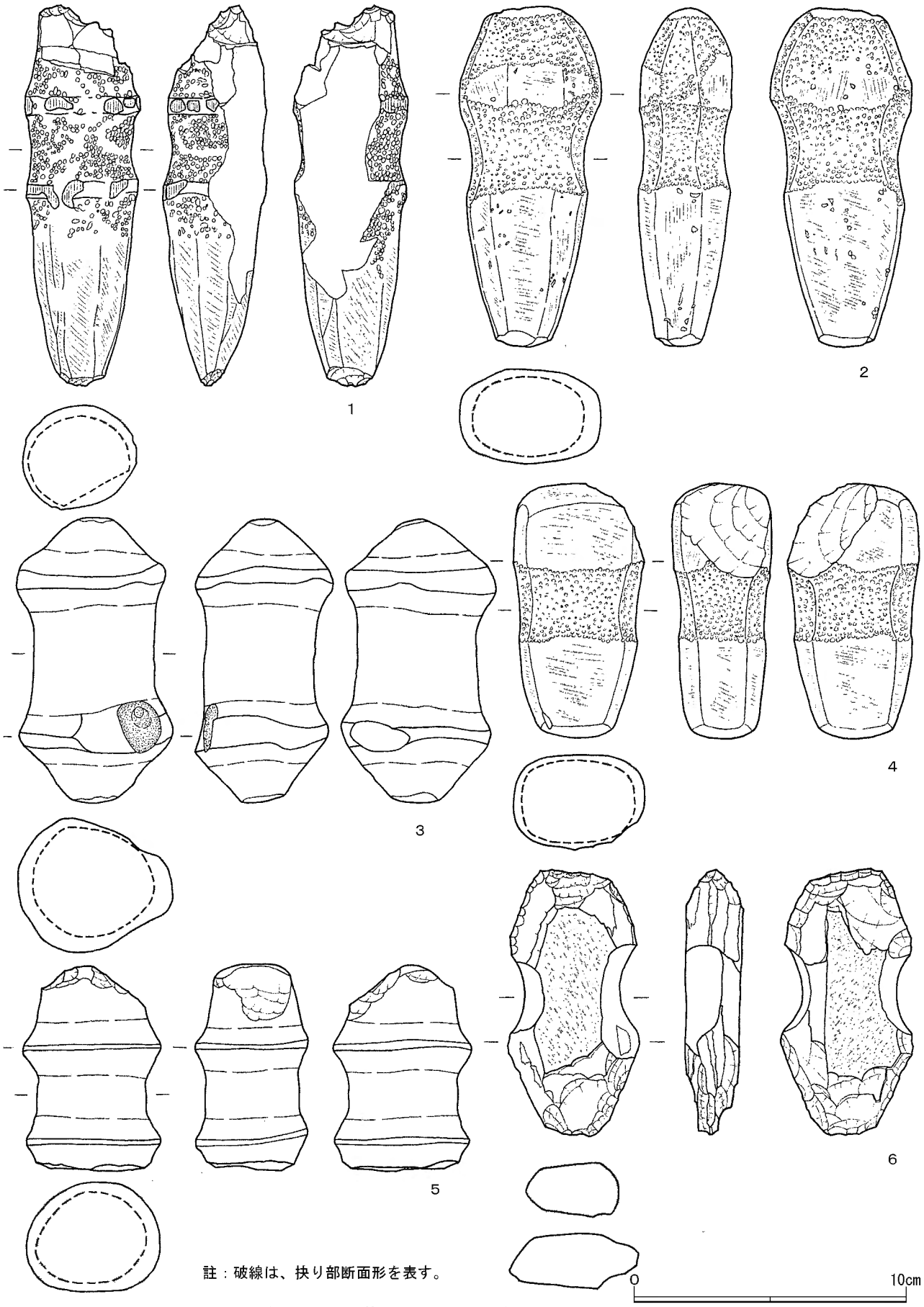
13O-10d グリッド遺物包含層から出土したものである。図上で上端部の一部が欠損しているが、形態は端部の長さがほぼ同じ上下対称形の独鈷石と考えられる。断面形は隆起部・抉り部ともほぼ円形で、端部は先端部にいくほど細くなる。中央部の抉り部と隆起部周辺に、製作時の敲打痕が斑点状に認められる。隆起部と端部は、研磨による擦痕が顕著である。敲打による整形後、中央部の隆起部と端部を研磨により仕上げており、端部は良く研磨され、稜線が明瞭である。上端部は大きく破損し、下端部の先端部には数度の打撃による剥離痕が顕著である。石材は、頁岩である。なお、器面に取り上げ時に付いたと思われる傷が多数認められたため、実測図には省略した。

37-b（第5図－2、写真図版3）

19R-8a グリッド古墳時代前期H-2号住居跡の覆土中から出土したもので、流れ込み資料である。形態は上端部が短く下端部が長い上下非対称形の独鈷石で、中央部の抉り部は全周するが隆起部は不明瞭である。断面形は中央部・両端部とも扁平である。中央部の抉り部と上端部の一部に製作時の敲打痕が斑点状に認められる。上端部の一部に粗い研磨痕が認められるが、下端部は丁寧な研磨により仕上げられている。両先端部は、磨耗痕が顕著である。石材は、緑色岩である。

37-c（第5図－3、写真図版1）

21V-11d グリッド低地部遺物包含層から出土したものである。形態は、全長の割に中央部の隆起部間が長く両端部が極めて短い上下対称形の独鈷石である。隆起部は帯状隆起となり全周し、断面形はやや歪な楕円形である。整形は、全体を丁寧な研磨により仕上げている。両先端部には、磨耗痕が顕著である。また、隆起部の内側に



第５図　千葉県内出土の独鈷石実測図（４）
１～６．千葉市内野第１遺跡出土(37-a～f)

凹石に見られる凹部状の凹痕が1箇所認められた。凹部の計測値は、直径1.80×1.60cm、深さ0.6cmである。その他、器面には強い被熱による赤化が認められ、被熱痕が顕著である。石材は、安山岩である。

37-d（第5図－4、写真図版3）

22U-3a グリッド低地部遺物包含層から出土した独鈷石である。形態は 37-b と同じ上下非対称形で、全長が 10 cmに満たない小型の独鈷石である。中央部の抉り部に製作時の敲打痕が斑点状に見られるが、両端部は丁寧な研磨により仕上げられている。下端部の先端部には、磨耗痕が顕著である。その他、上端部の一部が斜方向からの強い打撃により大きく剥離している。石材は、閃緑斑岩である。

37-e（第5図－5、写真図版3）

24S-15a グリッド遺物包含層から出土したものである。形態は、端部の一方を欠くが全長の割に中央部の隆起部間が長く端部が短い上下対称形の独鈷石で、37-c と近いタイプである。断面計は、中央部の抉り部から端部までやや歪な楕円形である。整形は、全体を研磨により丁寧に仕上げ、特に隆起部は丁寧に整形され帯状隆起となり全周している。上端部の先端部には、強い打撃による剥離痕と磨耗痕が顕著である。剥離面の観察から、剥離痕が先で磨耗痕が後である。また、下端部の折損部剥離面の凹凸を研磨により平坦にしており、使用法に関連する痕跡の可能性がある。石材は、閃緑斑岩である。

37-f（第5図－6、写真図版1）

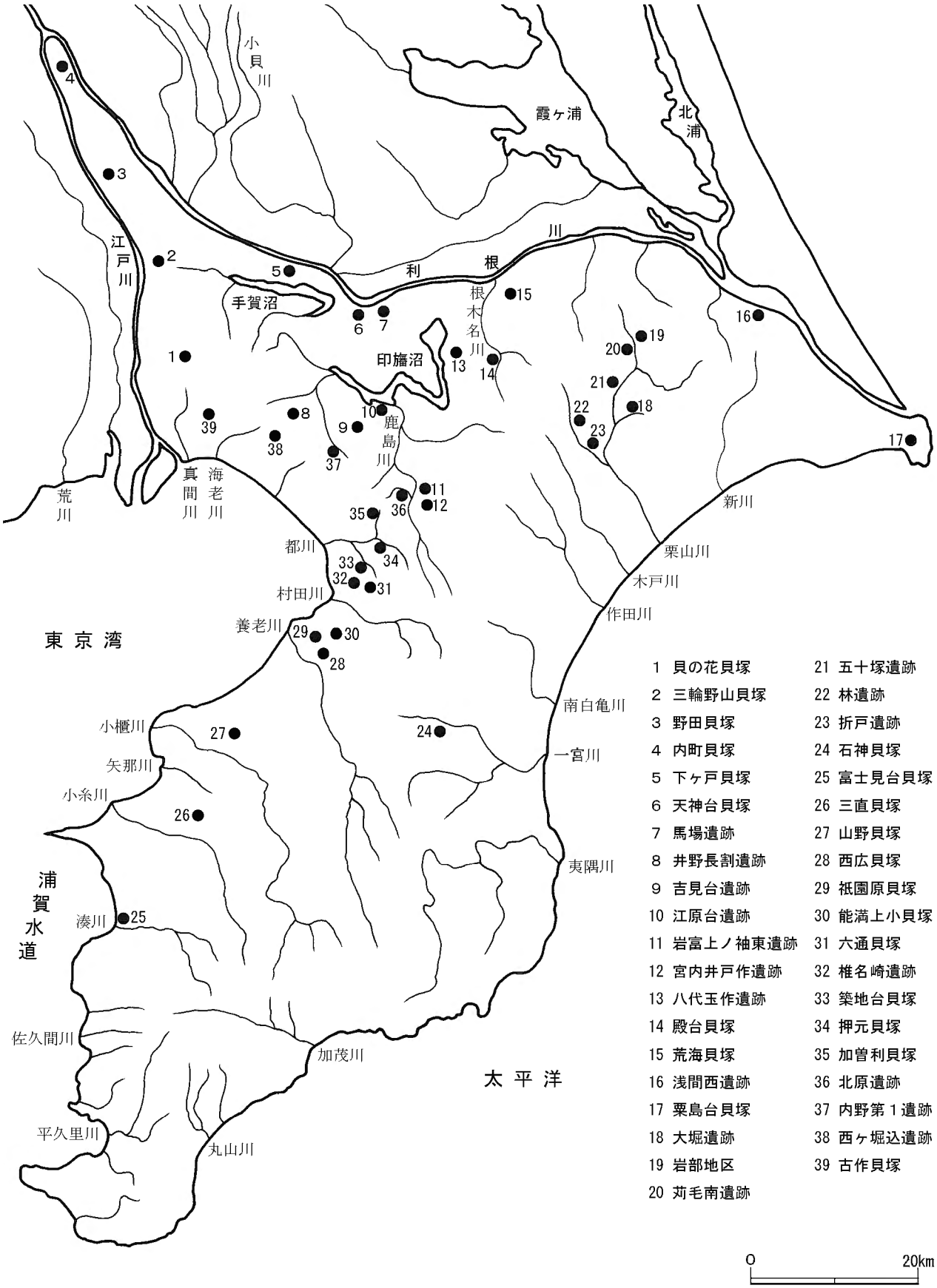
4エリア 21U-11 グリッド低地部黒色土中から検出された縄文時代後期末葉（安行2式期）の J-16 号住居跡から出土した独鈷石である。出土状況は、床面全面に堆積していた焼土直上から石棒・石剣・異形台付土器などの破片とともに出土したものである。形態は、上端部の長さが下端部より短い上下非対称形の打製の独鈷石である。板状に剥がした扁平な縦長の石を素材としており、両面に自然面を残している。扁平な石を両面からの剥離により中央部の抉り部や両端部をつくり出し、中央部の抉り部だけを研磨により丁寧に仕上げている。基本的な整形は、打製である。両先端部に数度の強い打撃による剥離面が多数あり、剥離痕が顕著である。なお、器面にはほぼ全面に被熱による激しい赤化が認められ、被熱痕が極めて顕著である。石材は、点紋緑泥片岩である。

なお、今回の調査研究では、前回の作業（小澤　1985a・b）で既に報告済みの資料や既に発掘調査報告書で報告されている資料について改めて実見し、第1図で示した計測位置で計測等を行い、第1表　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品一覧表を作成し、計測値等の補遺・訂正を行った。さらに、第7・8図　千葉県内出土の独鈷石（1）・（2）ならびに写真図版1～5でその全容を掲載した(16)。

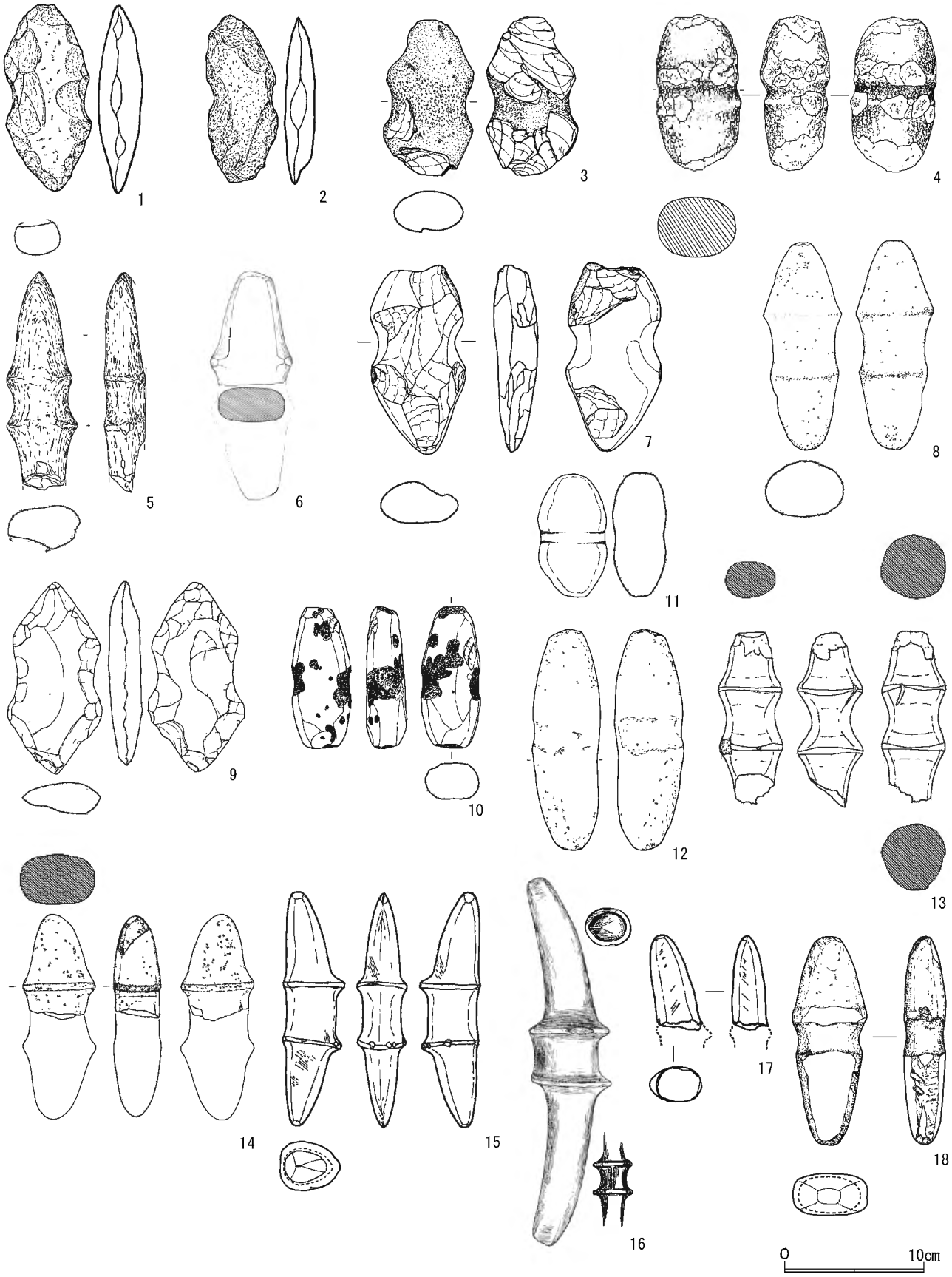
おわりに

今回、前回の作業（小澤　1985a・b）で明らかにした独鈷石・独鈷石形土製品資料に、その後の発掘調査による出土資料ならびに既に報告されている打製石斧のなかから新たに打製独鈷石と認められるものを加え、県内資料の累積を図った。現在、確実に県内資料と確認できた総数は、市川市内から出土した可能性は高いものの出土地が特定できない市立市川考古博物館所蔵の中島コレクション 40-a を除き、39 遺跡 64 点にのぼる(17)。

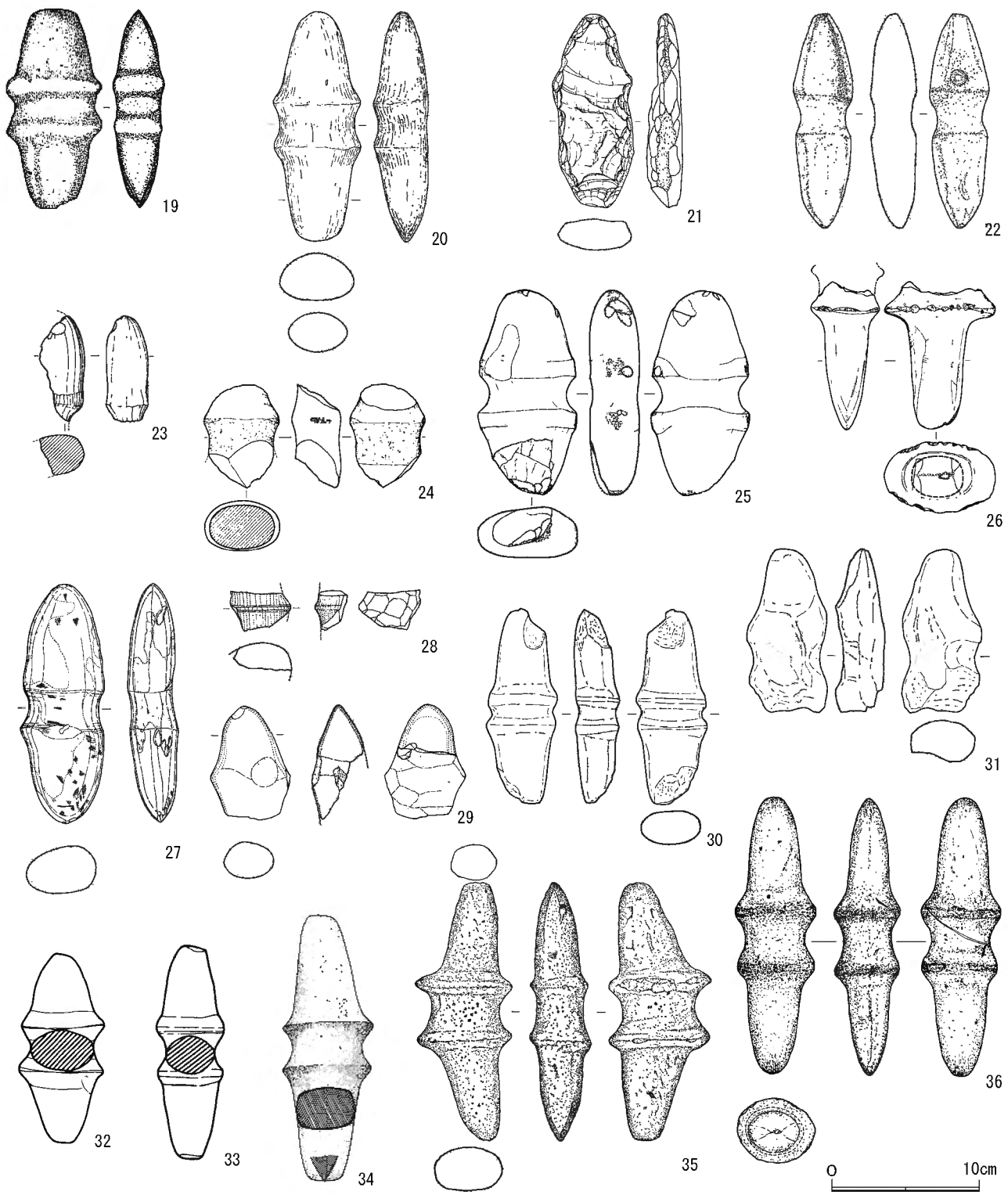
今回の調査研究で、赤彩が明瞭に施された独鈷石1点を確認した。佐倉市吉見台遺跡出土の打製独鈷石9-b（第7図－9）に、肉眼観察によりベンガラと思われる赤彩痕が剥離面の一部から抉り部付近まで広い範囲に認められた（写真図版1）。このような赤彩が施された打製独鈷石の存在から、打製独鈷石は明らかに未成品ではなく完成品であると考えるべき資料である。また、独鈷石の機能・用途に儀礼行為に用いた儀器としての機能・用途を補強するものと考えられる。



第６図　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品出土遺跡分布図



第７図　千葉県内出土の独鈷石（１）



1.2:1貝の花貝塚a.b　3:3野田貝塚a　4:4内町貝塚a　5:5下ヶ戸貝塚(下ヶ戸宮前)a　6:6天神台貝塚a　7:8井野長割遺跡a
8～10:9吉見台遺跡a.b.c　11:10江原台遺跡a　12:13八代玉作遺跡a　13.14:14殿台貝塚a.b　15:18大堀遺跡a　16:19岩部地区a
17:21五十塚遺跡a　18:22林遺跡a　19:25富士見台貝塚a　20.21:26三直貝塚a.b　22:27山野貝塚a　23～26:28西広貝塚a.b.c.d
27:29祇園原貝塚a　28.29:30能満上小貝塚a.b　30.31:32椎名崎遺跡a.b　32.33:33築地台貝塚a.b　34.35:35加曽利貝塚a.b
36:36北原遺跡a

第８図　千葉県内出土の独鈷石（２）

第1表　千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品一覧表

遺跡番号	遺跡名	遺物記号	通No.	遺跡所在地	遺存度	全長 a cm	隆起部径 b×c cm	抉り部径 d×e cm	隆起部間1・2 f・g cm	重量 g	石材	特記事項	先端部の剥離痕、磨耗痕の有無等	出土状況等	引用・参考文献等
1	貝の花貝塚	a	1	松戸市	10/10	13.87	6.41×3.00	5.41×2.79	4.40・3.58	303.4	安山岩	打製	剥離痕	AE=Ⅱ区遺物包含層	(八幡他 1973)
〃	〃	b	2	〃	10/10	12.06	5.20×2.26	4.27×2.14	2.70・2.50	171.0	ホルンフェルス	打製・被熱痕有	剥離痕	BF=a-4区遺物包含層	〃
2	三輪野山貝塚	a	3	流山市	10/10	13.92	7.17×5.33	5.66×4.37	4.50・3.80	259.8	スコリア(安山岩質)	磨製	磨耗痕・剥離痕	中央窪地遺物包含層	本稿、(小栗・小川・宮川 2008)
〃	〃	b	4	〃	5/10	(7.13)	4.73×4.05	3.89×3.38	—	(177.0)	緑色岩	磨製	剥離痕顕著	東窪地MHB3-172号住居跡覆土中	〃
3	野田貝塚 (第20次)	a	5	野田市	7/10	—	—	—	—	—	—	—	—	1号貝集積	(大熊・大賀・小川 2005)
4	内町貝塚	a	6	野田市	10/10	[11.40]	[6.10×5.30]	[5.80×4.40]	[1.50・1.20]	[572.0]	[砂岩]	[磨製・被熱痕有]	[剥離痕顕著]	Hトレンチ遺構検出面	(石井 1982・1988)(飯塚 2000)(小澤 1985b)
5	下ヶ戸貝塚(下ヶ戸宮前)	a	7	我孫子市	6/10	(15.43)	5.25×(2.97)	3.88×(2.83)	3.03	(265.0)	ホルンフェルス	磨製・大型	鋭く研磨	004号住居跡覆土中	(岡村他 1984)(石田 2000)(我孫子市 2005)
〃	〃 (下ヶ戸宮前)	b	8	〃	6/10	(11.52)	5.57×(2.75)	4.71×(2.73)	3.06・3.00	(299.5)	ホルンフェルス	磨製	剥離痕顕著	001号住居跡覆土中	〃
〃	〃 (第7次)	c	9	〃	1/10	(6.95)	—	—	—	(36.1)	安山岩	磨製・被熱痕有	—	D6グリッド遺物包含層	〃
〃	〃 (第7次)	d	10	〃	1/10	(6.48)	—	—	—	(34.5)	安山岩	磨製・被熱痕有	—	溝状遺構覆土中	〃
6	天神台貝塚	a	11	印西市	5/10	(8.47)	5.84×2.90	4.55×2.60	—	(193.1)	[花崗閃緑岩]	磨製・角状突起	弱い剥離痕	B地点第2層	(金子 1961)
7	馬場遺跡	a	12	印西市	10/10	20.53	10.90×5.83	8.39×4.23	4.50・4.30	1,448.0	輝緑岩	磨製・大型	研磨痕顕著	B4-05グリッド遺物包含層	整理調査中、(和田 2007)
〃	〃	b	13	〃	8/10	(11.31)	5.63×2.46	4.33×2.40	3.20	(201.3)	ホルンフェルス	磨製	剥離痕	溝状遺構覆土中	〃
8	井野長割遺跡(第5次)	a	14	佐倉市	9/10	(13.40)	6.80×2.65	5.50×2.93	3.20	(331.6)	〈砂岩〉	打製・被熱痕有	研磨痕顕著	環状盛土遺構Iトレンチ1a層	(小倉 2004)
9	吉見台遺跡	a	15	佐倉市	10/10	14.83	5.50×3.63	4.31×3.23	4.50・4.20	406.2	〈凝灰岩〉	磨製	研磨痕顕著	I-41グリッド遺物包含層	(近森他 1983)
〃	〃	b	16	〃	10/10	13.38	6.90×2.03	5.49×2.13	5.30・4.90	234.2	〈安山岩〉	打製・赤彩痕有	磨耗痕	I-52グリッド遺物包含層	〃
〃	〃 (A地点)	c	17	〃	10/10	10.17	4.22×2.77	3.88×2.62	2.40	203.9	〈閃緑岩〉	磨製・小型	剥離痕・磨耗痕	B6-3dグリッド遺物包含層	(林田 2000)
10	江原台遺跡	a	18	佐倉市	10/10	9.15	5.08×3.63	4.75×3.35	2.50	269.3	未鑑定	磨製・小型	磨耗痕顕著	M-012溝状遺構覆土中	(高田他 1980)
11	岩富上ノ袖東遺跡	a	19	佐倉市	10/10	15.77	6.51×3.96	4.85×3.48	2.95・2.67	399.6	変質閃緑斑岩	磨製	磨製石斧刃部状	耕作中に出土　檜垣熊吉氏発見	本稿
12	宮内井戸作遺跡	a	20	佐倉市	10/10	15.83	6.14×3.65	5.12×2.98	3.20	358.5	凝灰岩	磨製	磨耗痕	Ⅲ-3地区N25-45グリッド遺物包含層	整理調査中、(小倉 2003)
〃	〃	b	21	〃	4/10	(10.38)	—	—	3.20	(65.5)	頁岩	磨製	—	Ⅲ地区M26-48グリッド遺物包含層	〃
〃	〃	c	22	〃	10/10	9.88	5.84×2.41	4.71×2.40	3.20・3.10	253.9	透閃石岩	磨製石斧に改変	磨耗痕顕著	Ⅲ-2地区L26-18グリッド遺物包含層	〃
〃	〃	d	23	〃	3/10	(10.67)	4.21×—	—	3.20	(83.0)	ホルンフェルス	磨製	—	Ⅲ-3地区N25-06グリッド遺物包含層	〃
13	八代玉作遺跡	a	24	成田市	10/10	15.68	5.03×3.80	4.67×3.33	2.10	486.6	未鑑定	磨製・自然礫面有	磨耗痕顕著	039号竪穴住居跡覆土中	(天野他 1981)
14	殿台貝塚	a	25	成田市	9/10	12.22	4.76×4.47	3.53×2.55	4.30・3.90	311.9	〈粘板岩〉	磨製	両先端部剥離痕顕著	遺物包含層	(藤下他 1984)(寺内 1997)
〃	〃	b	26	〃	5/10	[7.70]	[5.30×3.50]	[4.30×3.30]	—	[183.5]	[緑泥片岩]	[磨製]	—	遺物包含層	〃 (小澤 1985b)
15	荒海貝塚	a	27	成田市	5/10	(4.73)	3.71×2.40	2.65×1.40	—	(27.3)	—	土製品	—	A地点Iトレンチ4区混土貝層	本稿、(西村他 1965)(西村 1976)(設楽・春成 2000)
16	浅間西遺跡	a	28	東庄町	7/10	(12.85)	4.42×2.53	2.84×2.28	3.80・3.40	(166.7)	角閃岩	磨製	磨耗痕顕著	敷地内西側より出土　林　保雄氏発見	本稿、(東庄町 1982)
17	粟島台貝塚	a	29	銚子市	10/10	〈15.00〉	—	—	—	—	〈安山岩らしい〉	〈磨製〉	—	吉田文俊氏発掘	(伊藤他 1959)(銚子市 1981)
18	大堀遺跡	a	30	匝瑳市	10/10	17.08	4.46×3.68	3.61×2.82	4.10・3.75	256.1	[斑れい岩]	磨製	磨製石斧刃部状	耕作中に出土　平山光一氏発見	(小澤 1985b)
19	岩部地区	a	31	香取市	10/10	〈26.36〉	—	—	—	—	—	磨製・大型	磨製石斧刃部状	岩部地区　石橋　晉氏宅所蔵品	(大野 1910)(千葉県君津郡教育会 1927)
20	苅毛南遺跡	a	32	香取市	10/10	18.59	3.86×2.72	3.05×2.06	3.16	237.2	角閃岩	磨製・美麗	剥離痕顕著	畑より出土　石橋茂助氏発見	本稿、(栗源町 1974)、

21	五十塚遺跡	a	33	多古町	3/10	〈6.65〉	—	—	—	〈65.3〉	〈輝緑岩〉	磨製	鋭く研磨	表面採集	〈小澤 1985b〉
22	林遺跡	a	34	多古町	10/10	14.97	5.34×3.03	4.33×2.72	2.50・2.20	258.2	〈斑れい岩〉	磨製	両先端部剥離痕	表面採集	〈小澤 1985b〉
23	折戸遺跡	a	35	芝山町	10/10	16.88	4.63×3.09	3.60×2.77	5.60・5.20	295.9	緑色凝灰岩	磨製	両先端部剥離痕	遺物包含層より桜田　努氏発見	本稿
24	石神貝塚	a	36	茂原市	〈破片〉	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	〈長南町 1973〉
25	富士見台貝塚	a	37	富津市	10/10	[13.30]	[6.30×3.40]	[5.20×2.90]	[2.70・2.50]	—	未鑑定	磨製	磨製石斧刃部状	昭和42年発掘調査区遺物包含層	〈杉山・金子 1972〉〈小澤 1985b〉
26	三直貝塚	a	38	君津市	10/10	15.37	5.82×3.64	5.00×3.25	3.00	382.1	〈砂岩〉	磨製・凹部有	両先端部剥離痕	SI-009遺物集中地点	〈吉野 2006〉
〃	〃	b	39	〃	10/10	13.34	5.22×2.46	4.83×2.03	4.80	218.9	〈砂岩〉	打製・自然礫面有	磨耗痕・剥離痕顕著	SI-029覆土中	〃
27	山野貝塚	a	40	袖ヶ浦市	10/10	14.75	4.12×3.19	3.19×2.73	3.00	293.8	〈凝灰岩〉	磨製	両先端部磨耗痕	昭和48年発掘調査区D7グリッド第1層	〈野村他 1973〉
28	西広貝塚	a	41	市原市	1/10	〈7.25〉	—	—	—	74.1	〈硬砂岩〉	磨製	—	SN561晩期遺物包含地点	〈滝口他 1977〉
〃	〃	b	42	〃	3/10	〈7.18〉	4.48×3.09	5.27×3.51	3.00	168.5	〈硬砂岩〉	磨製	—	B3-51地区3層下	〃
〃	〃	c	43	〃	10/10	[14.60]	[7.00×3.40]	[5.50×3.20]	[2.50・2.30]	[479.0]	〈石英安山岩〉	磨製	剥離痕	D4-42地区	〃　　〈小澤 1985b〉
〃	〃	d	44	〃	5/10	〈10.05〉	7.68×4.76	5.40×3.65	—	203.3	〈硬砂岩〉	磨製・被熱痕有	磨製石斧刃部状	C3-51地区3層	〃
29	祇園原貝塚	a	45	市原市	10/10	16.05	5.57×3.25	4.68×2.82	3.10・2.90	417.2	〈新期砂岩〉	磨製	弱い磨耗痕	D3-48グリッド遺物包含層	〈忍澤 1999〉
30	能満上小貝塚	a	46	市原市	1/10	〈2.65〉	〈4.34×—〉	—	—	31.5	〈砂岩〉	磨製・被熱痕有	—	12号住居址覆土中	〈忍澤 1995〉
〃	〃	b	47	〃	3/10	〈7.61〉	5.14×—	4.10×—	—	95.6	〈砂岩〉	磨製	弱い剥離痕	7Cグリッド	〃
31	六通貝塚	a	48	千葉市	5/10	〈7.05〉	6.22×4.55	5.03×3.40	—	164.1	未鑑定	磨製	弱い剥離痕	貝層中から出土か	本稿、〈三宅 1892〉〈伊藤他 1959〉〈東京国立博物館 1979〉
32	椎名崎遺跡	a	49	千葉市	10/10	13.34	4.80×2.98	4.13×2.45	1.75	243.5	未鑑定	磨製	両先端部剥離痕	表面採集	〈栗本他 1979〉
〃	〃	b	50	〃	7/10	〈11.18〉	5.47×3.35	4.46×2.70	3.20	232.2	未鑑定	打製・一部研磨	弱い剥離痕	表面採集	〃
33	築地台貝塚	a	51	千葉市	10/10	13.08	5.72×3.77	4.25×2.82	3.10・3.00	276.3	未鑑定	磨製	磨耗痕	3号住居址覆土中	〈折原 1978・2000〉
〃	〃	b	52	〃	10/10	14.52	4.67×3.70	3.29×2.72	3.10・3.00	306.0	未鑑定	磨製	磨耗痕	B85グリッド遺物包含層	〃
34	押元貝塚	a	53	千葉市	10/10	16.53	5.52×2.51	4.08×2.51	4.85・4.70	338.6	未鑑定	打製・一部研磨	剥離痕	不明	本稿
35	加曽利貝塚	a	54	千葉市	10/10	[18.00]	[6.10×—]	[4.70×—]	[3.00]	—	—	磨製	磨製石斧刃部状	加曽利B式土器が出土する地点	〈甲野 1941〉
〃	〃	b	55	〃	10/10	17.32	6.35×3.87	4.60×2.92	4.10・3.37	396.7	〈石英閃緑岩〉	磨製	磨製石斧刃部状	加曽利南貝塚第11区遺物包含層	〈滝口他 1968〉
36	北原遺跡	a	56	千葉市	10/10	18.71	5.52×4.43	4.01×3.22	3.90	413.2	[閃緑岩]	磨製	研磨痕顕著	耕作中に出土　石橋義雄氏発見	〈小澤 1985a〉
37	内野第1遺跡	a	57	千葉市	7/10	〈13.70〉	4.10×〈3.28〉	3.52×〈2.88〉	2.60	249.3	頁岩	磨製	剥離痕顕著	13O-10dグリッド遺物包含層	本稿、〈古谷・田中他 2001〉
〃	〃	b	58	〃	10/10	12.30	5.18×3.32	4.14×2.86	3.40・3.00	347.2	緑色岩	磨製	両先端部磨耗痕	19R-8aグリッドH－2号竪穴覆土中	〃
〃	〃	c	59	〃	10/10	10.25	5.58×4.87	4.34×3.98	5.20・4.70	304.0	安山岩	被熱痕有・凹部有	両先端部磨耗痕	21V-11dグリッド低地部遺物包含層	〃
〃	〃	d	60	〃	9/10	9.24	4.86×3.60	4.23×3.29	2.80・2.50	261.1	閃緑斑岩	磨製	磨耗痕顕著	22U-3aグリッド低地部遺物包含層	〃
〃	〃	e	61	〃	7/10	〈7.47〉	5.07×4.20	3.97×3.37	3.30・3.20	197.2	閃緑斑岩	磨製	剥離痕・磨耗痕	24S-15aグリッド遺物包含層	本稿
〃	〃	f	62	〃	10/10	9.70	4.82×2.05	3.34×2.06	3.20・3.00	125.5	点紋緑泥片岩	打製・被熱痕有	剥離痕顕著	低地部J-16号竪穴住居跡床直焼土上	本稿、〈田中 2005〉
38	西ケ堀込遺跡	a	63	船橋市	5/10	〈11.58〉	4.82×4.13	4.35×3.75	3.00・2.90	321.5	変質安山岩	磨製石斧に改変	磨製石斧刃部に研磨	42区8Wグリッド遺物包含層	整理調査中、〈中村 1995・1999〉
39	古作貝塚	a	64	船橋市	10/10	—	—	—	—	—	—	磨製	—	収集資料（染谷大太郎資料『観古帖』）	〈堀越 2003・2004〉
40	不明	a	65	市川市内か	10/10	16.22	4.65×3.41	3.47×2.85	4.10・3.60	299.2	[輝緑岩]	磨製	両先端部剥離痕顕著	収集資料（中島辨智コレクション）	〈堀越他 1980〉〈小澤 1985b〉〈山岸 1985〉〈領塚 1988〉

註：第1表の計測値データ等は、今回、小澤が行った調査による。〈　　〉は計測位置内に欠損があった場合で、— は計測や観察が不可能だった場合である。なお、[　　]は前回の調査〈小澤 1985b〉によるもので、〈　　〉は文献からの引用である。

被熱痕がある独鈷石を確認した。前回の作業で、野田市内町貝塚出土の独鈷石4-a(第7図-4)に強い被熱痕を確認した(小澤 1985b)が、今回の調査研究で松戸市貝の花貝塚出土の打製独鈷石1-b(第7図-2)、我孫子市下ヶ戸貝塚(第7次調査)出土の独鈷石破片5-c・d(写真図版3)、佐倉市井野長割遺跡出土の打製独鈷石8-a(第7図-7)、市原市西広貝塚出土の独鈷石破損品28-d(第8図-26)、能満上小貝塚出土の独鈷石破損品30-a(第8図-28)、千葉市内野第1遺跡出土の磨製独鈷石37-c(第5図-3)と打製独鈷石37-f(第5図-6)の8点に被熱痕を確認した(写真図版1)。これで、県内資料に被熱痕が確認できた独鈷石は、野田市内町貝塚出土の4-aを加えて合計9点となった。全体に占める割合は1割強であるが、このことから独鈷石を用いた儀礼行為に火の使用があった、あるいは、儀礼行為に被熱を伴う行為や状況があった可能性が高いと考えられる。

独鈷石を磨製石斧に改変しているものがあった。佐倉市宮内井戸作遺跡出土の独鈷石12-c(写真図版4)と船橋市西ケ堀込遺跡出土の独鈷石38-a(写真図版5)の2点である。宮内井戸作遺跡出土例は、独鈷石製作時に抉り部に残された斑点状の敲打痕が顕著であり、その敲打痕が磨製石斧に改変した際の研磨より古いことと、磨製石斧の器面に独鈷石特有の抉り部の斑点状の敲打痕が全周していた痕跡が認められたことから、横断面が扁平の上下非対称形の独鈷石を定角式磨製石斧に改変したものである。基部(頭部)には、磨耗面が2面認められた他、刃部には弱い剥離痕が顕著である。石材は鑑定の結果、透閃石岩であった。透閃石岩は、従来、蛇紋岩としていたものであり、垂飾などの装身具や小型磨製石斧・独鈷石等に用いられている。透閃石岩製の独鈷石が定角式磨製石斧に改変されていることから、透閃石岩製の小型磨製石斧や定角式磨製石斧にも儀器としての儀礼的機能・用途があった可能性が高いことを指摘しておきたい。

西ケ堀込遺跡出土例は、中央部の抉り部で折損した上下対称形の独鈷石を磨製石斧に改変したものである。独鈷石の折損した剥離面を研磨により平坦にして磨製石斧の基部(頭部)とし、先端部を研磨により両刃の刃部に仕上げている。宮内井戸作遺跡出土の独鈷石と西ケ堀込遺跡出土の独鈷石は、磨製石斧に改変している点では共通しているが、宮内井戸作遺跡出土例はおそらく完形品の独鈷石を定角式磨製石斧に改変し、西ケ堀込遺跡出土例は二つに分割あるいは折損した独鈷石を磨製石斧に改変しており、改変前の独鈷石の状態に大きな差があり、今後、磨製石斧への改変に至る経緯・背景を解明することが課題である。

今回、調査研究の対象とした独鈷石のなかで遺存度10/10と認められた35点の資料から、千葉県内独鈷石の全長の平均値を出した結果14.75cmであった。その平均値を大幅に超えるものがあった。香取市岩部地区(旧栗源町岩部)から採集された全長8寸7分(約26.36cm)の独鈷石19-a(第7図-16)が最大だが、残念ながら所在不明である。現存するものとしては、印西市馬場遺跡から出土した独鈷石7-a(写真図版3)が県内最大である。全長が20cmを超える20.53cmで、重量も1kgを超える1,448.0kgを計り、横断面が扁平で上下非対称形の大型の独鈷石である。同じタイプのものは、栃木県下都賀郡藤岡町藤岡神社遺跡(手塚 1999)や群馬県桐生市千網谷戸遺跡、同藪塚本町石之塔遺跡など渡良瀬川流域の遺跡からと常総台地の西側を北から南下する小貝川流域の茨城県南西部の遺跡から出土しており、印西市馬場遺跡は小貝川流域に近く、大型の上下非対称形7-aのタイプは、これ等の地域に特徴的に見られるものである。最小のものは、佐倉市江原台遺跡出土の10-a(第7図-10、写真図版4)で、全長9.15cmである。その他、全長が10cm未満の小型の独鈷石は、千葉市内野第1遺跡出土の全長9.24cmを計る磨製の独鈷石37-d(第5図-4、写真図版3)や全長9.70cmを計る打製独鈷石37-f(第5図-6、写真図版1)がある。なお、今回、本稿で明らかにした計測値の詳しい分析は、次号の第37号で報告する予定である。

今回の調査研究で、これまで打製石斧として報告されていた県内資料について再検討を行い、打製独鈷石として松戸市貝の花貝塚から1-a・b(第7図-1・2、写真図版3. 1)、佐倉市吉見台遺跡から10-b(第7図-9、写真図版

1)、君津市三直貝塚から26-b(第8図-21、写真図版4)、千葉市内野第1遺跡から37-f(第5図-6、写真図版1)の5点を確認した。また、一部に研磨整形痕が認められるが基本的には打製品であるものとして、佐倉市井野長割遺跡から8-a(第7図-7、写真図版1)、千葉市椎名崎遺跡から32-b(第8図-31、写真図版5)、同押元貝塚から34-a(第4図-3、写真図版2)の3点を加え、合計8点の打製独鈷石を確認した。おそらく、この他にも、これまで打製石斧として取り扱われている資料の中に打製独鈷石が含まれている可能性があり、再検討の必要性を指摘しておきたい。

今回の調査研究では、独鈷石資料を明確に把えるために、客観的な観察と計測値の統計的な蓄積が最も重要と考えた。そして、独鈷石の調査研究方法の確立を目指し、調査研究方法の基準を設けるという基礎作業を行い、その基準に基づいて流山市三輪野山貝塚出土の独鈷石をはじめ8遺跡から出土した14点に成田市荒海貝塚出土の独鈷石形土製品を加え合計15点を報告した(18)。そして、併せて千葉県内出土の独鈷石資料について、前回の作業にその後の新資料を加えて補遺・訂正を行い、現状を正確に把握することに努めた(19)。なお、各資料の所属時期の検討ならびに全体的な考察は、第37号で行う予定である。

最後に、本稿をまとめるにあたり多くの助言や資料の実見・掲載等で次の方々および機関にお世話になった(敬称略・五十音順)。石毛政雄、石橋博之、岡村眞文、岡村道雄、小川和博、小川勝和、小倉和重、小栗信一郎、忍澤成視、金子浩昌、倉田恵津子、栗原薫子、黒沢哲郎、駒井智幸、桜田　努、笹本良雄、柴田　徹、鈴木定明、諏訪　元、清藤一順、関口達彦、瀬戸久夫、染谷勝彦、高橋直樹、田中英世、檀谷健治、辻　史郎、戸村正己、中村宜弘、永塚俊司、那須正義、野口和己子、能城秀喜、濱名徳永、林　敬之、平田和弘、福間　元、古谷　毅、増崎勝仁、松田富美子、持田大輔、領塚正浩。東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、早稲田大学會津八一記念博物館、千葉県立中央博物館、財団法人千葉県教育振興財団文化財センター、千葉県立房総のむら風土記の丘資料館、千葉県立多古高等学校、我孫子市教育委員会、市原市教育委員会、佐倉市教育委員会、流山市教育委員会、成田市教育委員会、松戸市教育委員会、東庄町教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、財団法人印旛郡市文化財センター、(宗)芝山はにわ博物館、市立市川考古博物館、袖ヶ浦市郷土博物館、船橋市飛ノ台史跡公園博物館、松戸市立博物館。

なお、石材の鑑定は、貝の花貝塚出土の2点、三輪野山貝塚出土の2点、下ヶ戸貝塚出土の4点、馬場遺跡出土の2点、岩富上ノ袖東遺跡出土の1点、宮内井戸作遺跡出土の4点、浅間西遺跡出土の1点、苅毛南遺跡出土の1点、折戸遺跡出土の1点、内野第1遺跡出土の6点、西ケ堀込遺跡出土の1点の合計25点を、松戸市立博物館研究員　柴田　徹氏に肉眼鑑定していただいた。また、本稿の図版作成にあたっては当館学芸員　森本　剛氏の協力を得た。記して感謝お礼申しあげたい。

(千葉市立加曽利貝塚博物館)

註

1　奥付には1985年3月25日印刷、同年3月31日発行となっているが、実際に印刷および刊行されたのは数ヶ月後であった。

2　翌年の『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号「特集・1985 年の考古学界の動向」において、山本暉久氏に「単なる個別形態論的研究を超える方向性が期待されよう。」(山本暉久　1986)と評価されて以来 20 数年間、その言葉が長い間気にかかってはいたが、今日まで期待に答えることなく時間だけが過ぎてしまった。本稿で、少しでもその期待に答えられれば幸いである。

3　近年に提唱された名称には、「独鈷状石器」(渡辺　1961・2003、後藤　1985、平山　1998、滝沢　2001)、「独鈷状石製品」(米田　1981)、「白河型石器」(岡本　1996a)、「白川型石斧」(岡本　2003、2004、2006)などがある。

4 近年の研究成果により、独鈷石の所属年代が次第に明らかになりつつある。やや地域差があるものの出現は、縄文時代後期前半からとする見解(鈴木 1981)と縄文時代後期中葉からとする見解(後藤 1985)がある。そして晩期を経て消滅は、弥生時代中期前半とする見解(後藤 1985)と弥生時代中期後半とする見解(岡本 1999b)がある。

5 佐倉市岩富上ノ袖東遺跡出土の独鈷石1点、香取郡東庄町浅間西遺跡出土の独鈷石1点、香取市苅毛南遺跡出土の独鈷石1点、山武郡芝山町折戸遺跡出土の独鈷石1点、千葉市六通貝塚出土の独鈷石1点、同押元貝塚出土の独鈷石1点の計6点は過去に報告がある(山岸 1985他)が、今回、共通の各部位の名称と計測位置等を提案するのを機会に、改めて実測ならびに計測・写真撮影等を行い本稿で報告した。また、成田市荒海貝塚出土の独鈷石形土製品1点についても過去に報告されている(西村他 1965、西村 1976)が、この機会に改めて実測ならびに計測・写真撮影等を行い本稿で報告した。なお、図版組みについても縦組みに統一した。

6 岡本は打製独鈷石として、横断面が扁平な青森県下北郡東通村札地遺跡採集資料、新潟県岩船郡朝日町三面元屋敷遺跡出土資料、岐阜県吉城郡国府町立石遺跡出土資料、青森県内資料の4点をZタイプ(札地型)とした。

7 隆起部を凸部、抉り部を凹部としているものがある(山岸 1985～)が、独鈷石の部位名称として相応しい名称ではないと思われる。また、隆起部の呼称として「鍔」・「節」がある。「鍔」は既に刀剣類の一部位の名称となっているので、独鈷石に使うべきではないだろう。「節」は全周する竹の節を連想してしまう。独鈷石の隆起部は全周するタイプと全周せず一部が隆起するタイプがあり、節状とはならないものがある。また、抉り部の呼称として「溝」があるが、「溝」は如何なものかと思われる。

8 今回、本稿で示した計測位置は最低限の計測位置であり、今回の計測位置には含めなかったが、栃木県下都賀郡藤岡町藤岡神社遺跡で試みた様に、形態によっては隆起部2箇所についてそれぞれ計測する(手塚 1999)ことや、先端部の最大幅と最大厚などを計測することも有効なデータとなる可能性がある。

9 ダイヤル・ノギスは、株式会社 Mitutoyo製 0.01mm単位計測器を使用した。

10 電子計測器は、株式会社 島津製作所製 BL－620S 0.01g単位計測器を使用した。

11 ここで言う「磨耗痕」とは、磨石に見られる様な拳大の礫状の石の縁辺部を広く使った磨耗痕ではなく、独鈷石の先端部という極めて限定された部位に認められる磨耗面のことである。

12 石材の鑑定をしていただいた松戸市立博物館研究員 柴田 徹氏より、「おそらく火山から噴出した火山弾を利用したものであろう。」とコメントをいただいた。

13 芝山町折戸遺跡出土を芝山町殿部田遺跡出土としたり、発見者である桜田 努氏を戸村正己氏が発見としている記述がある(山岸 1986)が、大きな誤りがある。

14 六通貝塚は、東側に分布する貝層の一部や周辺部がかつての「大金澤村」・「大金澤町」に広がるが、貝塚の主体部を含む大部分は「小金澤村」・「小金澤町」の「飛地」に所在した。区画整理前の所在表記としては、「小金澤村」・「小金澤町」とすべきである。

15 前回の作業(小澤 1985b)でこの独鈷石の出土地を長谷部貝塚としたが、誤りであった。六通貝塚に訂正させていただきたい。

16 第7・8図千葉県内出土の独鈷石(1)・(2)のスケールは1/4に統一した。また、横組みの実測図は縦組みに統一して組み直した。なお、一部2～3点の資料について、資料保管者の都合で今回は実見ならびに計測等の調査ができなかったものがあった。

17 2004 年に県内資料を集成した一覧表がある(山岸 2004a・b)が、出土地不明の中島コレクション中の1点と有角石斧(有角石器)の柄部を独鈷石とした成田市台方花輪台貝塚採集資料や所在不明の東京大学所蔵とした我孫子市下ヶ戸貝塚 a、『千葉県の貝塚』(千葉県 1983)に記載されているとした下ヶ戸貝塚 c は下ヶ戸貝塚 b と重複、富士見台貝塚bとしたものは挙げている参考文献に見当たらなかった。それら5点を除くと 29 遺跡 40 点を挙げている。県内出土の独鈷石資料は 2003 年の時点で 38 遺跡 62 点の累積があり、山岸の一覧表(山岸 2004a・b)には9遺跡 22 点の欠落があった。実に、3割強の資料が欠落していたことになる。

18 実測図版の組み方は、既に縦組みにすることが提案されている(岡本 1996a・1999b)。近年、独鈷石は先端部の剥離痕や磨耗

痕の研究から、槌・敲打具や磨石などと同じような行為を伴う道具であることが解ってきている。また、今回の調査研究で、佐倉市宮内井戸作遺跡出土例と船橋市西ケ堀込遺跡出土例の2点の独鈷石が、磨製石斧に改変されたこを明らかにした。近年、多くの発掘調査報告書や研究論文では縦組みが普及しているが、まだ一部の発掘調査報告書や研究論文のなかには横組みが見られる。打製石斧や磨製石斧と同じように縦組みにし、第1図に示した展開図に基づき縦組みに統一していきたいと思う。

19 今回、本稿で明らかにした資料65点（市川市内の遺跡から出土した可能性もある中島コレクション40-aを1点含む）が県内出土独鈷石・独鈷石形土製品の全てとは思わない。まだ、所在する可能性はあると思われる。本稿で漏れている独鈷石資料に気付かれた方や、保管・所蔵している打製石斧のなかで打製独鈷石ではないかと思われた方は、是非、小澤まで連絡していただければ幸いである。

引用・参考文献

青柳好宏　2007 『平成15年度　佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書　間野台貝塚（第５次）・曲輪ノ内貝塚（第２次）・岩富上ノ袖東遺跡（第３次）』　佐倉市教育委員会

我孫子市史編集委員会　2005 『我孫子市史』原始・古代・中世編　我孫子市教育委員会

天野　努他　1981 「Loc39（八代玉作）遺跡」『公津原Ⅱ（本文編・挿図編・図版編）』　千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター

飯塚博和　2000 「内町貝塚」『千葉県の歴史』　資料編　考古１　千葉県

石井　穂他　1982 『内町貝塚発掘調査報告書』関宿町埋蔵文化財調査報告第６集　関宿町教育委員会

石井　穂　1988 「内町貝塚出土遺物資料紹介」『関宿町町史研究』創刊号　関宿町教育委員会

石田守一　2000 「下ヶ戸宮前遺跡」『千葉県の歴史』資料編　考古１　千葉県

伊藤和夫他　1959 『千葉県石器時代遺跡地名表　―県下の石器時代遺跡の分布とその分化―』　千葉県教育委員会

稲村坦元他　1951 『埼玉県史』第１巻　埼玉県

上田英吉　1887 「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学会雑誌』第２巻第19号　東京人類学会

大熊佐智子・大賀　健・小川将之　2005 『野田貝塚―第20・22次発掘調査―　清水遺跡』野田市埋蔵文化財調査報告書第29冊　野田市教育委員会

大野雲外　1909 「独鈷石の形式分類に就て」『東京人類学会雑誌』第24巻第276号　東京人類学会

大野雲外　1910 「机上の友（一）」『東京人類学会雑誌』第26巻第297号　東京人類学会

岡村眞文他　1984 「下ヶ戸貝塚」『我孫子市埋蔵文化財報告』第４集　我孫子市教育委員会

岡本孝之　1996a 「最後の白河型石器」『異貌』15　共同体研究会

岡本孝之　1996b 「足洗型石器論ノート」『西相模考古』第５号　西相模考古学研究会

岡本孝之　1999a 「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第84巻第３号　日本考古学会

岡本孝之　1999b 「遺物研究　独鈷状石器（独鈷石・白河型石器）」『縄文時代』10　縄文時代文化研究会

岡本孝之　2003 「扁平な白川型石斧」『利根川』24・25　利根川同人

岡本孝之　2004 「埼玉県白川型石斧の再検討」『異貌』22　共同体研究会

岡本孝之　2006 「青森県の白川型石斧」『古代』第119号　早稲田大学考古学会

岡本孝之　2008 「静岡県の白川型石斧」『西相模考古』第17号　西相模考古学研究会

小川勝和・小栗信一郎　2003 「遺跡速報　三輪野山貝」『月刊　考古学ジャーナル』№509　ニュー・サイエンス社

小倉和重　2003 『宮内井戸作遺跡発掘調査概報』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第200集　財団法人

印旛郡市文化財センター
小倉和重　2004『井野長割遺跡（第５次）　－市内重要遺跡確認調査報告書－』　佐倉市教育委員会
小栗信一郎・小川勝和・宮川博司　2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市埋蔵文化財調査報告Vol.40
流山市教育委員会
小澤清男　1985a「千葉市旦谷町北原遺跡発見の独鈷石」『貝塚博物館紀要』第12号　千葉市立加曽利貝塚博物館
小澤清男　1985b「千葉県八日市場市大堀遺跡出土の独鈷石と他２例」『法政考古学』第10集　記念論文集　法政考古学会
忍澤成視　1995『市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第55集　財団法人市原市文化財センター
忍澤成視　1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　市原市教育委員会
小田野哲憲　1991「Ⅴ遺構外の遺物　石製品」『上村貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
第158集　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
折原　繁　2000「築地台貝塚」『千葉県の歴史』資料編　考古１　千葉県
折原　繁他　1978『千葉市築地台貝塚・平山古墳』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告２　財団法人千葉県
文化財センター
金子浩昌　1961「天神台貝塚」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』（本編）　千葉県教育委員会
栗源町史編さん委員会　1974『栗源町史』町制施行50周年記念　栗源町役場
栗本佳弘他　1979『千葉東南部ニュータウン６　―椎名崎遺跡―』　財団法人千葉県文化財センター
甲野　勇　1941「独鈷石資料」『古代文化』第12巻第５号　日本古代文化学会
小金井良精　1890「本邦貝塚ヨリ出ヅル人骨ニ就テ」『東京人類学会雑誌』第６巻第56号　東京人類学会
後藤守一　1941「独鈷石に関する共同調査」『古代文化』第12巻第４号　日本古代文化学会
後藤信祐　1985「独鈷状石器小考」『唐澤考古』第5号　唐沢考古会
酒詰仲男　1959『日本貝塚地名表』日本科学社
鈴木道之助　1981『図録石器の基礎知識Ⅲ』縄文　柏書房
設楽博己・春成秀爾　2000「荒海貝塚」『千葉県の歴史』資料編　考古１　千葉県
杉山林継・金子裕之　1972「千葉県富士見台遺跡の調査」『考古学雑誌』第58巻第３号　日本考古学会
袖ヶ浦市史編さん委員会　1999『袖ヶ浦市史』資料編１　原始・古代・中世　袖ヶ浦市
高田　博他　1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター
滝口　宏他　1968『加曽利貝塚Ⅱ　―昭和39年度加曽利南貝塚調査報告―』貝塚博物館資料第２集　千葉市加曽利貝塚
博物館
滝口　宏他　1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ　上総国分寺台遺跡調査団
滝沢規朗　2001「新潟県の独鈷状石器」『新潟考古』第12号　新潟県考古学会
田中正太郎・林　若吉編　1887『日本石器時代人民遺物発見地名表』第１版　東京帝国大学
田中英世　2005「千葉市内野第１遺跡出土の石棒・石剣」『貝塚博物館紀要』第32号　千葉市立加曽利貝塚博物館
近森　正他　1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』　佐倉市遺跡調査会
千葉県教育委員会　1983『千葉県の貝塚　―千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書―』　千葉県文化財保護協会
千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区（改訂版）―』
千葉県教育委員会　1998『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）―』
千葉県君津郡教育会　1927『千葉県君津郡誌』上巻　臨川書店

千葉市教育委員会　1984 『千葉市埋蔵文化財分布地図（改定版）附篇』千葉市教育委員会

千葉市誌編纂委員会　1953 『千葉市誌』千葉市

千葉市史編纂委員会　1976 『千葉市史　史料編１』原始 古代 中世　千葉市

千葉市史編纂委員会　1977 『千葉市史』史料編２　近世　千葉市

千葉市史編纂委員会　1993 『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上巻　千葉市

銚子市史編さん委員会　1981 『銚子市史』　銚子市

長南町史編さん委員会　1973 『長南町史』　千葉県長生郡長南町

手塚達弥　1999 『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第197集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

寺内博之　1997 『成田市郷部北遺跡発掘調査報告書　第２分冊　―南台遺跡・立野遺跡・殿台遺跡―』　成田市郷部北遺跡調査会

東京国立博物館　1979 『東京国立博物館収蔵品目録』（先史・原史・有史）

東庄町史編さん委員会　1982 『東庄町史』上巻　東庄町

戸村正己他　1995 『芝山町史』通史編　上　芝山町

中村宜弘　1995 「西ケ堀込遺跡」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―平成５年度―』　千葉県教育委員会

中村宜弘　1999 「船橋市田喜野井・西ケ堀込遺跡について　―縄文時代の集落―」『資料館だより』第75号　船橋市郷土資料館

西野雅人　2000 「六通貝塚」『千葉県の歴史』資料編　考古１　千葉県

西村正衛　1976 「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）―東部関東における縄文後，晩期文化の研究（その二　続き）―」『学術研究―地理学・歴史学・社会科学編―』第25号　早稲田大学教育学部

西村正衛他　1965 「関東における縄文式最後の貝塚　―千葉県成田市荒海貝塚―」『科学読売』第17巻10号　読売新聞社

野口義麿　1974 『粟島台遺跡　―1973年度発掘調査概要―』　銚子市教育委員会

野中完一　1900 「打製独鈷石に就て」『東京人類学会雑誌』第15巻第168号　東京人類学会

野村幸希他　1973 『袖ヶ浦町山野貝塚』　東京電力株式会社・財団法人千葉県都市公社

初鹿野博之・山崎真治・諏訪　元　2006 『東京大学総合研究博物館　人類先史部門所蔵陸平貝塚出土標本』東京大学総合研究博物館標本資料報告　第67号　東京大学総合研究博物館

林田利之　2000 『吉見台遺跡　A地点　―縄文時代後・晩期を主体とする集落跡と貝塚の調査―』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告第159集　佐倉市・財団法人印旛郡市文化財センター

平山紋子　1998 「栃木県内出土の独鈷状石器集成」『栃木県考古学会誌』19　栃木県考古学会

藤下昌信他　1984 『成田市郷部北遺跡群調査概要（加定地・殿台遺跡）』　成田市郷部北遺跡調査会

古谷　渉・田中英世他　2001 『千葉市内野第１遺跡発掘調査報告書』第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ分冊　財団法人千葉市文化財調査協会

堀越正行　2003 「記録にみる染谷大太郎氏の業績」『沼南町史研究』第７号　沼南町教育委員会

堀越正行　2004 「(1)　染谷大太郎資料」『千葉県の歴史』資料編　考古４　千葉県

堀越正行他　1980 『中島辨智コレクション』市立市川考古博物館

三宅米吉　1892 「雑案数件」『東京人類学会雑誌』第７巻第74号　東京人類学会

茂木克美　1987 「栃木県粟野町久分遺跡群出土の独鈷石について」『唐沢考古』７　唐沢考古学会

山岸良二　1985 「千葉県出土の独鈷石」『考古学雑誌』第70巻第４号　日本考古学会

山岸良二　1986 「千葉県出土の独鈷石補追(1)」『東邦考古』11　東邦考古学研究会

山岸良二　1987 「埼玉の独鈷石」『埼玉の考古学』　新人物往来社

山岸良二　1989 「南関東の独鈷石　―東京・神奈川の現況―」『東京考古』７　東京考古談話会

山岸良二　1990 「北関東・独鈷石概観」『東国史論』第５号　東京考古談話会

山岸良二　2004a 「祭祀用の石器」『千葉県の歴史』資料編　考古４　千葉県

山岸良二　2004b 「千葉県出土の独鈷石一覧表」『東邦考古』28　東邦考古学研究会

山本暉久　1986 「1985年の動向　縄文時代（東日本）」『月刊　考古学ジャーナル』№263　ニュー・サイエンス社

山本直人　1998 「独鈷石」『祭祀具Ｉ－石川県考古学資料調査・集成事業報告書－』石川県教育委員会

八幡一郎他　1973 『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第４集　松戸市教育委員会

University of Tokio　1884 『Catalogue of Archaeological Specimens with Some of Recent Origin.』Scientific Museum, Department of Science,University of Tokio

吉朝則富　1987 「独鈷石集成」『飛騨の考古学遺物集成』Ⅱ　高山市教育委員会

吉朝則富　1995 「独鈷石の追加資料」『どっこいし』№48　高山考古学研究会

吉野健一　2006 『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書７　―君津市三直貝塚―』　財団法人千葉県教育振興財団

米田耕之助　1981 「独鈷状石製品覚え書」『古代』第71号　早稲田大学考古学会

領塚正浩　1988 「中島辨智氏旧蔵の石器（１）」『市立市川考古博物館年報』№16　市立市川考古博物館

和田伸哉　2007 「印西市馬場遺跡（第５地点）」『印旛郡市文化財センター年報23　―平成18年度―』　財団法人印旛郡市文化財センター

渡辺　誠　1961 「所謂独鈷状石器の未成品の例」『貝塚』第103号

渡辺　誠　2003 「独鈷状石器の着装法」『史峰』第31号　新進考古学同人会

9　吉見台遺跡 b 赤彩痕

1　貝の花貝塚 b 被熱痕

30　能満上小貝塚 a 被熱痕

8　井野長割遺跡 a 被熱痕

28　西広貝塚 d 被熱痕

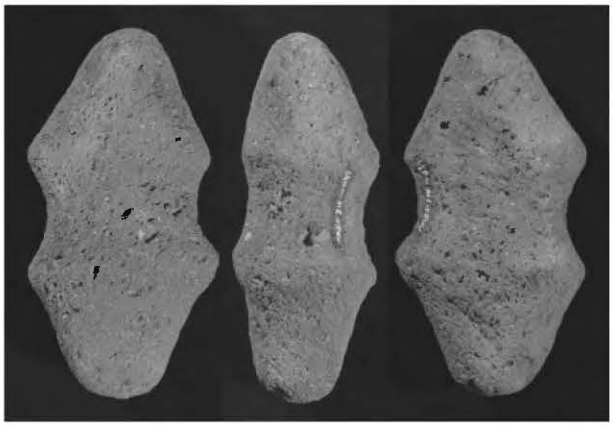
37　内野第１遺跡 c 被熱痕

37　内野第１遺跡 f 被熱痕

20　苅毛南遺跡 a 岩質の特徴を出し美麗に仕上げた独鈷石

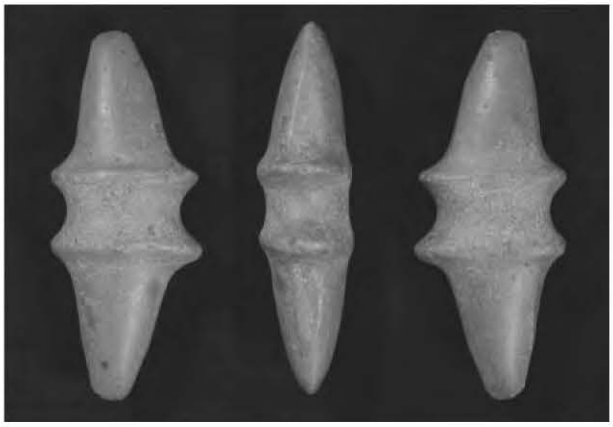
15　荒海貝塚 a 独鈷石形土製品

写真図版１　赤彩痕・被熱痕がある独鈷石など



2 三輪野山貝塚 a

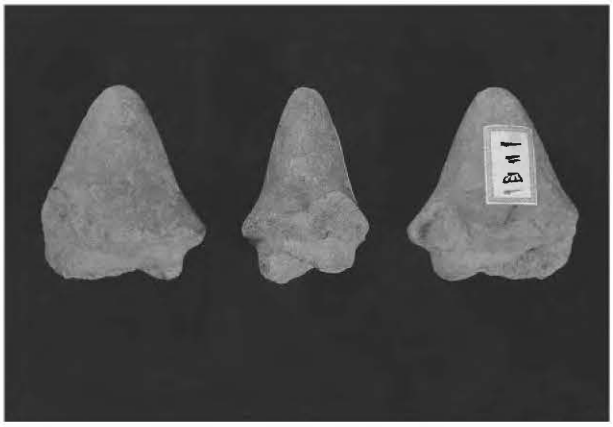
2 三輪野山貝塚 b



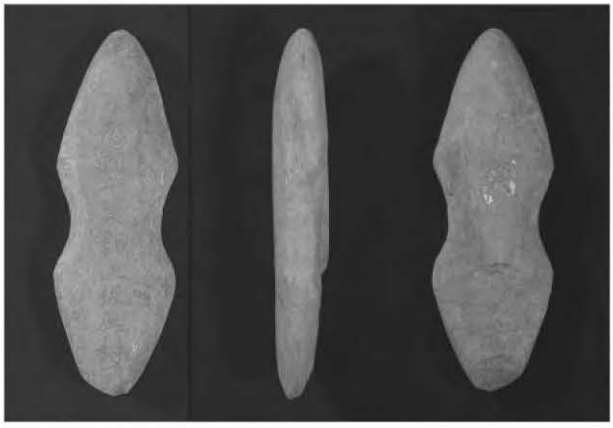
11 岩富上/袖東遺跡 a

16 浅間西遺跡 a

23 折戸遺跡 a



31 六通貝塚 a



34 押元貝塚 a

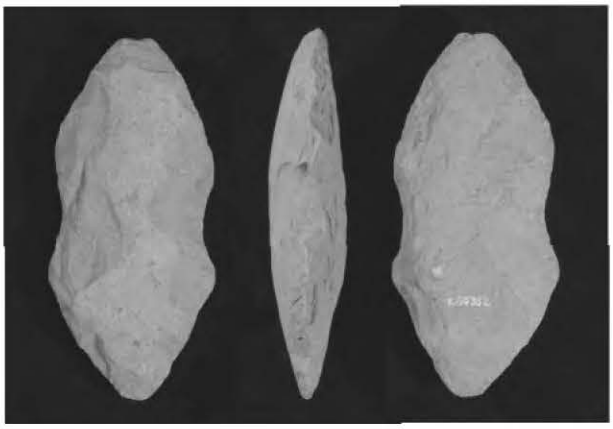
37 内野第１遺跡 a

写真図版２ 千葉県内の独鈷石

37 内野第１遺跡 b

37 内野第１遺跡 d

37 内野第１遺跡 e


1 貝の花貝塚 a

5 下ヶ戸貝塚 a
（下ヶ戸宮前）

5 下ヶ戸貝塚 b
（下ヶ戸宮前）

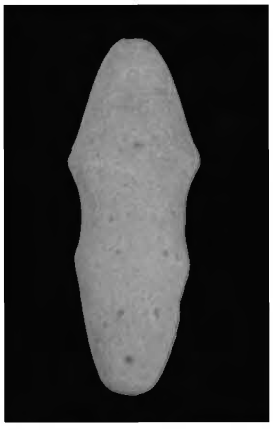
5 下ヶ戸貝塚（７次）c

5 下ヶ戸貝塚（７次）d

6 天神台貝塚 a

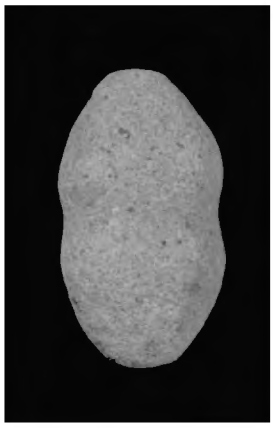
7 馬場遺跡 a

7 馬場遺跡 b

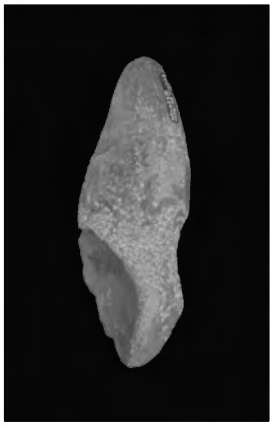

9 吉見台遺跡 a

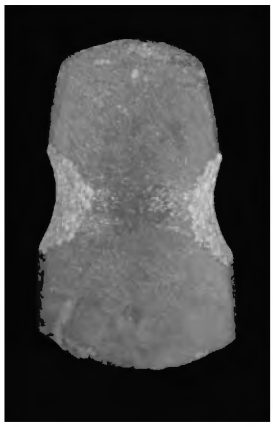
写真図版３　千葉県内の独鈷石

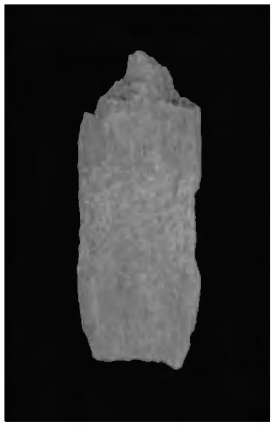
9 吉見台遺跡(A地点) c


10 江原台遺跡 a

12 宮内井戸作遺跡 a


12 宮内井戸作遺跡 b


12 宮内井戸作遺跡 c


12 宮内井戸作遺跡 d

13 八代玉作遺跡 a

14 殿台貝塚 a

18 大堀遺跡 a

21 五十塚遺跡 a

22 林遺跡 a

26 三直貝塚 a

26 三直貝塚 b

27 山野貝塚 a

写真図版４ 千葉県内の独鈷石

28 西広貝塚 a

28 西広貝塚 b

29 祇園原貝塚 a

30 能満上小貝塚 b

32 椎名崎遺跡 a

32 椎名崎遺跡 b

33 築地台貝塚 a

33 築地台貝塚 b

35 加曽利貝塚 b

36 北原遺跡 a

38 西ヶ堀込遺跡 a

39 古作貝塚 a

40 中島コレクション

写真図版５　千葉県内の独鈷石